（七）斯かる人の作法は頼もし

予が平生御身に對し、口を極めて教誨したるが如く、交友の自己に與ふる感化の大なるは、今に至りて愈〻判明したるべし、さなきだに青年時代にありては、克己、耐忍の力を喚起して、一心の統治を修め難く、從つて作法に於ては、下賤、陋劣に失し易きものなるに、眼前に不良の友人の實例を示されては、如何でか之を見倣はずして止むべきか、御身にして苟くも品位あり、光輝あり、萬人の間に處しても恥しからぬ作法に通曉し、御身の人格を高めんことを欲するに於ては、如何なることありとも、斯かる不良の人と交るべからず。

之に反し、品性の偉大にして、氣質の快活に、人に接して謙退、辭讓に出で、然かも言語に於ても行爲に於ても、明快にして優婉に出づるものは、其作法に於ても必ず人に長たるべきものあり、斯かる人物に接するは御身の智識を增進し、見識を開拓するに於て有益なるのみならず、作法の修養に於ても得る所決して尠きにあらざるが故に、御身は斯かる人物と交誼を結ぶことを力めざるべからず、從つて善良にして快活なる作法は、決して書籍の力のみに因りて修養し得られざるの理を悟了したるならん。

（八）活ける作法を摸範とせよ

勿論書籍は作法に必要なる注意事項を暗示することあるが故に參考としては有益なるべきも、書籍の上のみにて其眞相を悟り難し、左れば是非とも書籍以外に就て、更に活ける作法の模範を求めざるべからず、而して此の活きたる作法の摸範には、品性の雄大にして

人格の高き有爲の人物に就て學ぶ外に良師あらざるものなり。

確かに優婉、快活の作法は、先輩の爲す所の進退、應對の振合如何を篤斗注意して之を見倣ふに因りて修養し得らるゝものなり、百聞は一見に如かずとの俚諺の如く、自己の畏敬する人物の爲す所に就て、自ら倣はんと力め、斯くて自己の缺陷と認むべき所をば悉く排除して假借することなくんば、如何なる人も漸次にして、品位あり、愛嬌ある作法を呑み込み得るに至るべし、然らずして漫然として孤立孤行の身となりて、口舌の上のみにて作法の如何を批評するが如きは、實行の上に於て何等の益する所なきものにして、寧ろ賤むべき次第といふべし、御身にして是非とも優婉の作法を修めんとの意あらば、平生深く斯かる人物の日常生活に注意して、如何なる時に如何なる行動に出づるかと深く研究し置かざるべからず。

（九）百聞は一見に如かず

是を以て御身が善良なる作法に通曉するの主意より、將た又御身の品格、風尙を向上、發展するの見地よりして、出來得る限り先輩に知遇を求め、之と懇親の交際を結ぶ方法を講ぜざるべからず、御身にして常に此の如き心懸けにて偉大の人物若くは先輩に知遇を求めて之と友誼を重ぬるに至れば、彼等が他人に對する作法を目擊し得るに至るべく、從つて御身が他人に對するの仕打ちも、成程斯の如きものかなと始めて合點するに至るべし、予は青年時代よりして作法の修養に就て隨分苦心を凝らし、自ら發明する所も尠なからざりしが故に、御身に對して申述ぶべきことも尠なきにあらざるを確信すれども、御身が先輩、識者の應接振りに對して自ら心を潛むることあらんには、予が御身に申し送るより以

上の教訓あるべし、蓋し作法の如きは、必ずしも規則詰めに之を説明し難く、寧ろ實踐躬行の上に於て始めて現はるゝものなれば、御身に於てはよろしく、此等を參酌して自ら工夫を凝らすを要す、御身にして此の心を以て心となさんには、御身の品性は一段と改良せられ、御身の作法は一層の進歩を見るに至るべく、從つて御身の知人は御身に對して從來に倍すべき尊敬、信任の念を挾むに至るべし。

（一〇）先輩に對する後進の心得

御身が作法の圓熟を期し、品性の修養を謀るに於て、先輩、識者の感化が斯く迄に重大に利益は斯くまで多きを認めたる以上は、此等の人物と交際を結ぶに就て全力を注ぐの要あり、玆に一つ注意すべきは、御身以上の人に對しては、御身と對等の人に接するが如き態度にては不可なり、よろしく自ら卑下して其教を乞ふに吝なることなかれ、若し夫れ然らずして、御身と對等の友人、若しくは御身以下のものに對すると同一の行動に出づることあらんには、先方に於ては斯かる態度の人を喜ばざるのみならず、寧ろ之と談話を交ふるを煩はしく感じて面會さへも謝絶するに至るべし、自己の先輩たるもの或は識者たる人に向つて、至大の尊敬を拂ひ、之が指導を受けんことを望むは、後進者の守るべき禮儀にして又其義務なり、此の義務と禮儀を盡して自ら卑下して教誨を求むるに出づる以上は、如何なる人に於ても、必ずや寛大の念と快活の意氣を以て自己と交ることを辭することなかるべく、若し必要あらば、彼等自ら諄々として訓戒を下すの勞を取ることすら厭はざるべし。

（一一）作法上守るべき三大要件

予は御身の作法中にて特に注意を要すべき件々を左に列記して御身の今後の參考に供せんとす。

【食卓上の作法】御身が較〻もすれば、飲食の時に急食するの風あるは御身の爲に取らざる所なり、如何にも周章狼狽して久しく食物に事缺きたる人の如く思はれて見苦し、何處迄も沈着の襟度を保ち、靜かに飲食するが上品の作法なりとす、特に食事の時に音を立て、或はムシャ〳〵と嚙み附き、或は汁を啜るにガブ〳〵と音する如きは、如何にも犬馬に類する行爲にして陋劣の大なるを示す、飲食するに於ても其作法の高下は明かに現はるゝことを忘るべからず。

尤も不體裁と思はるゝは、傍にフォークのあるにも關はらず、或は皿中の食物をナイフを以て積み上げて口にするが如き、甚だ忌はしきことにあらずや、又食卓の上に肉汁、或は其他の流動物を垂らしたる時に、急ぎハンケチにて之を拭はんとするが如きは、不體裁の至りならずや、斯かる失態は輕率より出づれども、一旦斯くありと見たる上は、給仕人に命じて處理せしむべき也。

【服裝其他の習慣】概して言へば御身の服裝は如何にもダラシなし、例へばズボンの釦を外したる儘にて他人の前に出づるとか、ネクタイの曲りたるまゝ外出するとか、カラの汚れて目立つものさへ着けて平氣に外出すること、鼻孔より鼻毛の長く延びて垂下し居るにも關はらず、剪裁せざることの如きは、實に不注意の大なるを示さずや。

葬式に臨むにフロックコートを着用したるは可なれど、赤皮の靴を穿き派手な色合のネ

クタイを着くるといふに至りては、禮儀を亂すも亦甚しからずや。

先日の山岡氏を訪問したる時の如きは、目深かに帽子を冠り、且つ雨天の翌日なりしために因れるか、『靴掩ひ』を被らせたる靴にて應接室に入り、甚しきは雨のために濡れたる蝙蝠傘をさへ携へて室内に入りしは驚き入りたることならずや、玄關口に斯かる物品を置くべき設備あるに此の如き始末では、予は御身が果して作法の一般を辨ずるか否やを疑ひたる程なりき。

【交際席上の不注意】　先日山形子爵の邸内に開かれたる園遊會に御身の出席したる時の如き、實に御身の爲に迷惑したる者多くありたりと聞けり、そは面白くもなき話を多數の人々に強て聽かしめんとして冗舌を弄したるが如きは、片腹痛き次第といふべし、自己の談話に興味のあるや否やは、他人に問はずとも自身にて十分判斷の出來るものならずや、自己が餘り氣乘りもせぬやうの談話を無理に聽かさんとすればとて、人をして退屈を感ぜしむるものなれば、油斷するが間違なり。

他人が戯れに御身に對して批評を加へたりとするも、苟も惡意にあらざるを知らば、笑て之を忍ぶべし、然るに御身は較ゝもすれば直ちに憤怒を洩らし、滿面朱を濺ぎ相手を睨み附く、何たる頑固無作法の行爲ぞや、多數の人に交るに一々他人の罪なき惡口を眞面目に受けて爭論すれば、一生を通じて紛議の絶ふることゝてはなかるべし、今少しく襟度を大にし、些末の事にて心を動かさゞるべき偉人の雅量に顧みて自ら改むることを爲さずんば、到底作法の圓熟を望むべからず。

以上指示したる所は、未だ予の言はんとする所思を盡したるものにあらずといへども、圓熟の作法が如何程迄人心に感化を與へ、處世上に如何なる地位を占むるかを窺ひ得るに

足るべく、併せて之が修養の道の存する所も略ゝ知悉せられたるなるべし、御身が今後に於て爲すべき最良唯一の手段は、如上説明したる所に準據して、躬行實踐、以て御身が作法に對する面目を一新するにあり、予は御身が一日も早く此の域に達して、予の期待する所に反かざらんことを望むものなり、時下積雪深く春寒料峭、身骨に徹す、乞ふ自愛せよ。

二月十一日　父より

"Truth, justice and reason lose all their force, and all their lustre, when they are not accompanied with agreeable manners." ——*Thomson.*

第十信　奮鬪的生活の効果を説く書

（一）人生の波瀾を凌ぐ一大武器

我が親愛なる秀雄よ、御身は久しく實際的活社會に入るの準備を積みたることなれば、此の間に於て、學校教育以上の有益有用なる學科を履習せられたること大なるべし、斯かる經驗は、實務家として立つべきものに取りては、金錢を以て計量ずること能はざる程の重大なる價値ありと信ず、總じて經驗を積むの一事は、人生の波瀾を凌ぐに就て一日も缺くべからざる最良の武器たるものなり、只此の經驗を利用すると否とは、各自の世に處するに於て成敗を決すべきものなれば、自家の實驗したる觀察に徴して、各自の行動を左右

するは、智者の取るべき路なり若し夫れ愚者、遲鈍漢に至りては、之を識別するの能力を缺き、折角の經驗をも有効的に利用すること能はざるは、如何にも口惜しき限りにあらずや。

御身は事を處するに就て兎角に他人にのみ依賴するが如き形跡あるは平生予の最も遺憾とする所なり、予は御身が已に活社會に入るの用意として幾多の經驗を重ねたれば、斯かる依賴心は頓に一變すべしと竊かに期待する所ありしに、依然として舊套を脱するに由なく、特に予が多少の地位と財産あるを恃みて、之を人に誇示するの色あるは喫驚の念に堪へず。

（二）　予は世路の辛酸を辭せざりき

特に御身が精勤、奮鬪の實を擧げずとも、世上一般の人と並行して生活しつゝ行くに於ては、是早何等の不自由を感ぜざるが如く思料するを見ては、御身が將來の立身榮達の爲め、憂慮の念に堪へざるものあり、予が今日の地位に立ちたる所以は、單に父祖傳來の名譽と財産を繼承したるものにあらず、御身が予の膝下に侍したりし際屢〻物語りしたるが如く、予の兩親とも元來鄕里に於て富有の身にして一大信用を收めしものなりしも、火災に次ぐに天災に遇ひ、傳來の財産を悉く消失するの止むなきに至りたる上に、予の父は不幸にも一身を戰場に曝らし、母は醫藥に親しみ力となるべき予の兄上には他鄕にありて夭折を見るに至りたりければ、一家の困難言語に絶せり、予は斯かる慘狀を見る毎に斷腸の念の禁ずること能はざると同時に、母の教訓に勵まされ是非とも一家を恢復して昔日の如くならしめんと欲し、當時僅かに十九歳の少年に過ぎざりしも、世路の辛酸を嘗め、櫛

風沐雨十年の間といふものは、一日といへども之を肝銘して忘るゝの暇なかりき。

（三）予が少年時代の決心

予は如何なることありとも斷じて素志を貫かんものと覺悟を定め、困難といふ困難、辛苦といふ辛苦は殆んど凌ぎ盡したりしが、天道は人を殺さずとの語に洩れず、二十九歳の時に至りて、漸く獨立して一家を經營し、相當の地位を占め、他人に對しても恥しからぬ交際をなし得るに至りたり、左れば予にして今日些少の資産を有するも、こは決して父祖の力に待ちたるものにあらずして、粒々皆辛苦して得たるものなり、予は御身が精勤を盡さずして予の財産に依賴せんとするの念を去らざるを見る時は、予の有する總ての財産は、悉く公共的使用のために寄附して、寸毫も殘留する所なからんとす、予が斯くまで辛酸を嘗めて作り得たる財産は如何なる目的のために消費するとも、予の隨意にして他人より干渉を受くべき理由あらず、御身の如きは予が相當の資産ある時に於て生れたるものなれば、予の慘憺たる當時を目擊すること能はざりき、且つ又學校教育の如きも何等の不自由なくして受けたることなれば、此上もなき幸福の身といはざるべからず。

（四）此以上は自身にて奮鬪せよ

御身は何等の不自由を感ぜずして思ふが儘に所好の學科を履習し終りたるが故に、父として御身に對する義務は既に濟みたるものなり、此の上の處世上の成敗如何は、予の義務にあらずして御身自身の責任問題なり、頑是なき小兒に對しては是非を辨別すべき能力の缺如するがため、一々指導、補助して教誨するは、父の義務に屬すれど、已に御身の如く

成熟して青年となり、理解力の十分に發達したるものに向つては、予は其必要を認めざるものなれば、御身の實力に信頼して成功を奏するやう望まざるを得ず。

父兄が些少の資産あるを恃みて、自ら奮勵、猛進すべき元氣と精神を消失するに至るは、青年に取りて此上もなき危險なるのみならず、一身の榮達、成功の途を杜絶するものにして最も忌はしきことなり、世上の眼識なき父兄にありては、一時の愛情に溺るゝがために、這般の眞理を看破するの暇なく、愛子の要求に遇へば、一も拒絶することをなさずして、成人の後に至るも、多額の金員を送附して、放蕩、奢侈の資を供するを常とす、然かも一家の資産には限りありて慾望には限りなきも猶且つ其子を教誨することを知らず、敷て失敗、蹉躓を蹈ましむるに至る、陋なりといふべし、予は如何なることありとも、斯かる父兄と其撰を異にするが故に、御身は自身の才幹、力量のあらん限りを盡して、御身の力にて向上發展の道を開かれよ。

（五）奮鬪の勝利者の經歷を見よ

飜つて今日に於ける實業界の偉人を見るに、一として身を赤貧より起し、隻手空拳を揮つて前後に横はれる困難、辛苦を排除し、奮鬪力行して今日の光榮ある勝利を收め、世界の尊敬と信任を博したるにあらざるものなきに徴するも、如何に此の奮鬪的決心の成功を奏するに就て有力の武器たるかを證明せざるにあらざるなし、御身が平素愛讀せる『實業の帝國』の著者たるカーネギー翁の如きは、世界の鋼鐵王として、天下に於て其名を知らざるものなきの人なるにも關はらず、其身許を洗へば、蘇格蘭の貧家に身を起し、米國に渡りて非常の苦心と奮迅を嘗めたるの經驗に基きて、力行、精勤を盡し一日といへども

缺くことなく翁が今日あるを致したるものは洵に偶然にあらざるを知るに足るべし、是れ予の今更説明する迄もなく、『實業の帝國』を飜讀せられなば、成功の要素としての奮闘の眞價は、御身に於て疾くに判斷せられたる所なるべく、御身も必ず首肯せらるゝことならんと信ず、翁の如きは眞に是れ現代富豪中の大人物として尊重するに足るのみならず、自助的人物の典型として、青年に對して好個の活きたる教訓を與ふるものにあらずや。

（六）成功の人は自助の人也

此種の例を求むれば殆んど無限にして一々縷指するに遑なきものなり、モルガンといひ、ヒルといひ、グールドといひ、ワナメーカーといひ、マーシャル、フ井ルドといひ、ハリマンといひ、何れも皆自助的人物にして、彼等は自己の力を盡して精勤、奮闘するとも、他人の偏頗心と助力にのみ依賴して、姑息的成功を求めんとするが如き偷安の心なきは、如何にも讃嘆に値ひす。

かゝる偉人の感化を蒙り、斯かる奮闘的生活に倣ひて、青年の身を以て實業界に入りて堂々として大成功をなすに至りたるものは、其數の餘りに多くして數へ盡すことを得ずといへども、要するに自己の實力に信賴して、發奮、勵精するに於ては、如何なる人といへども、將來有望の地位に達し得ざるの理は斷じて之あらず。

由來米國は新進敢爲の氣に富みて資本充實し、人才輩出するが故に、從つて生存競爭の激甚なるの結果、尋常一樣の手緩き方法にては、到底他人に對して機先を制すること能はざるより、是非とも奮闘生活を送らざるべからざるの必要に迫らるゝや論なし。

（七）將來の世界と奮鬪の大勢

思ふに今後に在ては此の傾向はます〳〵顯著なるに至るべきは大勢の赴く所として、免るべからざるものなり、我が日本に於ても、世人の眼が奮鬪の一事に注意し來れるは、力量あり才幹ある青年に取りて、最も喜ぶべきの現象と見做さゞるを得ず。

怠惰、因循の夢を貪りつゝ、精勤、力行、猛進を厭ふの青年に取りては、此のこと如何にも煩勞を感ずべしといへども、怠惰、偷安の身を以てしては、何れの時代に於ても頭角を現はすことを得ず、立脚の地歩を伸ぶることを得ざるは、遠き古より然るものにして、今日に始まりたるものにあらず、元來人間としては額に汗して麵麭を得るを恥辱の如く思ふものこそ心得違ひの大なるものにして、この自活力こそ最も光榮に値ひし尊重すべきことに屬す、自己が十分に働き得べき體格と才幹を備へながらも、之を活用することを怠りて、只管他人の財産、助力に依賴せんとするが如き人こそ恥辱の最上ならずや、此の輩が處世上に於て失敗と蹉躓を重ぬるに至るべきことは、何れの方面より見るも免れ難きことなり、從つて青年としての元氣を消沈せしめ、熱誠の不十分なる輩の運命は之を豫知するに難からざるべし。

（八）怠惰偷安を惡むロ氏の態度

ローズヴエルトの如きは、實に奮鬪的生活の必要を口にして止まざるのみならず、之を實行するに於て敏なるは、普く萬人の知悉する所にして、御身に於ても恐らく之を傳聞したることならむ、氏の雄大にして爽快に、大膽にして勇進的氣質を持し、政治問題を解決

するに於ても、日常實務の衝に當る時にも、此の精神を持して動かず、怠惰、偷安の徒を厭ひ、精勤、力行、秩序の人を賞揚して、其前途の大成を待つの熱心なるに至りては、天下無比と稱すべし、是を以て彼の精力の絶倫にして意志の强健なる何者も以て之を制すること能はず、其着眼の高遠なる、見る者をして景仰の念に堪へざらしむるものは、此の決死的精神に驅られて奮鬪的生活を送るの賜にして、天下の快事たるを失はず。

如何なる人に論なく、其精神に於て、其計畫に於て、其實行の點に於て、精勤、熱誠、克己、勇進ならんには、積日の惰眠を破つて、席天幕地、萬人の視目を惹くに足るべき偉大の成果を奏し得らるべきは、事理明白にして疑ふべきの餘地なし、實業界の對壘血戰は、政界に於ける變動、計畫と必ずしも軌を一にすべきものにあらずといへども、其全力を發揮して、奮鬪、勵精を盡し、一事業に對して全力を傾注すべき熱誠、勇氣の必要なるは、此二者の間に於て何等の區劃を立つべきものにあらず。

（九）御身の學ぶべきは此所にあり

ローズヴェルトが平生口にして萬人に臨む所のものは、御身の如き前途に望を有する青年に取りては、之を反覆誦讀すべき價値あるものなり、曰く『凡そ如何なる邦國にても、其基礎を勤儉、力行てふ物質的繁榮の上に立つるにあらずんば、到底其國運の悠久を期すること能はず、卽ち事業に臨みて精力あり、計畫ある活動場裏に於て、確に不拔の奮鬪力を有することは、最も缺くべからざるの要素なり、然れども單に物質的繁榮のみを恃める國民にては眞正に偉大なる國民たること難し、彼れ工場、鐵道の建設者、頭腦的手腕を以て多大の富を致したる人傑に對しては、無論敬意を表すべし、何となれば國民は彼等よ

り多額の債務を負へばなり、然れどもリンコルンの如き政治家、グラントの如き軍人、即ち其性格の更に高潔なるものに對しては、眞正に偉大なる國民にして、我等の負債の一層多額なるを感ぜざることを得ず。』

（一〇）高尚なる職分の眞意を解せよ

『彼等は事業と奮闘の法則をば、其實行に於て示し、更に全備を期せんがために、個人以上に別に高き職分の存せることを認識せしむるに力めたり、所謂別に高き職分とは何ぞや、曰く國民に對する職分、及び民族に對する職分即ち是れなり、我等は國境内に躊躇し、單に衣食の計の成るあれば、十分なりとして其他を顧みる事をなさゞる群小の商人輩と伍すること能はず、此の如きは要するに失策を招くの基なるなり、今や列國の民は、益〻其利益範圍を擴張し、其間の關係も亦密接となれるが故に、吾人は宜しく安逸の生活を排除して、奮闘勤勉の生活を營むべきを説かんとす、二十世紀は青年輩が其運命を双腕に任せて開拓をなすべき活天地なり、我等にして懶惰を事とし、徒らに安逸、無爲をのみ是れ求め、險を冒して利を收むべきの難境に立つを恐れんか、大膽にして强健なるものは、忽ちにして我等を壓して、我等を左右せんとするに至るや必せり、是を以て吾人としては、大膽に奮闘的生活を試み、勇敢に其職分を全ふすることを期せざるべからず、計畫に於ても實行に於ても正義を恐るゝことなく、且つ剛毅なれ、理想の高きに亘ることあるも、其方法は實際的ならんを要す。』

（一一）正義の奮闘こそ天地に愧ぢず

『人苟も奮鬪す、其奮鬪にして正義のためならんには、身の何れにあることを問はず、此の奮鬪的熱誠に對して恐怖、躊躇することなかれ、何となれば、人は奮鬪を經、困難を嘗め、危險を冒して後に始めて玆に偉大なる人物として一身の光榮を示すに足るべければなり』と、是れ單に一時の豪放を遣るの閑文字にあらずして、字々句々、悉く彼が人生の經驗を嘗めたる所に徵して肺肝より湧き出でたるものなれば、御身の如きは、之を以て單に快筆を弄したるものと見做すことなく、尊敬の念を以て讀まざるべからず。

ローズヴエルトが熱誠、眞摯の念より迸出し來れる奮鬪的教訓は單に是れに止らずして、更に御身のために之を示すべきもの多々ありとなすといへども、其中最も重大にして、御身の元氣を鼓舞し、精神を督勵せしむるに足るべしと思はるゝ二三の例を擧ぐれば、左の如し、曰く

『如何なる境遇の青年も、其業務に對して怠惰なることを許さず、青年輩に於ける業務は、研學を意味するものなり、勿論青年時代に學生として不成績なりしものも、成人となるに及んでや、赫々として成功を奏するに至るべき實例に乏しからず、然れども斯かる例外の場合を一例として引用するは、喩へば盲目者の時に其身の不具者なるにも拘はらず、能く自己の弱點に打ち勝ちて世界に於ける大業を成就し、不朽の名譽を博したる者あるの故を以て、盲目能く爲すあるに足れりと辯護するが如し。』

（一二）一生を通じて無能に終る

『青年子弟たるものに向つて過度の奮鬪を勸むるは予の本意にあらず、然れども青年輩は、須らく其職業に忠實にして精勤、實行の大決心なくんば斷じて不可なり、是れ第一に

好機會を捉へんが爲めのみ、第二には精勤の快味と眞價を悟らんが爲めのみ、自己の爲すべき所に對して冷淡怠慢なるは、一生を通じて他の業務に於ても亦等しく無能なるに終るべければなり、勿論自己の性格、如何に因りて、自己の最も適當なるものを撰擇するは可なり、然るに之を撰擇して最良のものを取るにも關はらず、其全力を擧げて之を傾注するにあらずんば、果して何の見る所あらんや、又果して何の功果を收むるを得んや。

自己の業務に對して忠實、勤勉なることは、猶是れフートボールの競技に於て其全力を傾注するが如くせざるべからず、「働く時に働き、遊ぶべき時には遊べ」といふ格言を實行するものは何れの點よりするも、聰明、怜悧の青年たるに恥ぢざることゝいふべし。』

（一三）　善良活潑なる青年の資格

『善良にして活潑なる青年たるものに於て始めて玆に偉大の成績を收め、勇進、猛驅して最後の勝利を博するに足るべき敢爲の人物たるを望むに足る、單に外見のみ善良らしくして實行の之に伴はざるが如きものにては、前途に光明を放つこと能はざるものあるや歴然として之を指示するに足るなり、而して眞個に善良、有爲の青年たるの資格は、單に消極的善行のみを以て足れるものにあらず、進んで積極的奮鬪心に富み、決斷に勇なるにあらずんば共に語るに足らず、斯かる青年に於ける奮鬪心の中には、言ふ迄もなく、一般の善德、邁往、勇進、廉潔、大膽、氣骨の分子を含蓄するなり。

吾人の所謂善良なる青年とは、其業務に對するも、將た人生に處するに於ても、常に最良の成績を收め豪膽にして畏るゝ所なき圓滿充實の行爲あるものたるを要す、覇氣縱横にして、清廉、潔白、總ての點に於て間然する所なき青年が、其儕輩と僅少なる後進者に對

して如何許りの感化を與ふるに足るかは、今之を算出し能はずとするも、若し彼にして眞個に氣骨を缺き、奮鬪的猛進的決心なきに於ては、如何なる人も、彼を尊敬するに至らざるべく、寧ろ他人の冷評、輕侮を以て迎へらるゝことありとするも一言も之を追窮すること能はざるべき也。』

（一四）斯の如きこそ眞個の奮鬪生活

『苟も一事に對して全力を傾注し、之に當るの大決心あるにあらずんば、到底善美なる事業に當ること能はざるものなりと記憶せられよ、此の際に於て最も注意を要するは、精勤の巧妙なる使用法を講ずるにあり、卽ち業務を處理するに當りては、自己の空想、妄念を克制し、一擧一動に於ても極めて謹嚴にして禮を失することなく、一心不亂に一事に對して熱誠、忠實を献げて、之が完成を期するものにして始めて玆に雄大善美に且つ前路に赫灼たる光明を點ずるに足るべき奮鬪的生活を送り得らるべし』と。

予は御身に對して十分の教訓を傳へんがため、量らず今日の多忙なる時間の大半を消費して、ローズヴェルト前大統領の所見を抄譯すること長きに亘れり、予が斯く長文の引證をも煩はしとせずして之を御身に示す所以のものは、要するに予が御身に語らんとする所を十分に說明しあるのみならず、寧ろ予が語らんとするより以上に適切にして有要なる教訓の滿幅せるを以て、之を借り來りたるまでのみ、御身にして苟も冷靜の念と沈着の頭腦を以て、此の教訓の中に含蓄せる眞味を嘗め且つ之を實踐せられんには、御身は如何なる場合にあるを問はず、他人に依賴するが如き卑怯なる心を去りて、善く公明正大にして、萬人の間に處して恐怖、躊躇することなき奮鬪生活の神髓を取得するに於て遺憾なきを期

すべし。

（一五）依頼心を恥辱と感ぜよ

習慣は第二の天性なり、御身にして怠惰、安逸、依頼心に流れんには、一小些事に對してすらも、御身の身體、精神を役することの如何にも過勞にして堪ふべからざることを感ずれども、一旦心を決して直進、勇往、萬難を排除すべき奮闘的生活を送らるゝに於ては、怠惰、倫安の如何にも無氣力にして乾燥無味なるに驚き、一日といへども、此の奮闘心を棄つること能はず、他人の力に依頼することは、青年としての恥辱に失する行爲たるを認むるに至らん。

ベンジャミン、フランクリンは『怠惰の人たるを恥ぢよ、精勤の家には債鬼も入ること能はず、捕吏も其門を侵す所なし』と言ひて、其時代の青年を訓戒したるが、此の言たる今日何れの點より見るも御身に取りて好個の師友たるに足るなり、要するに御身が將來に就て業務的經營に對して一身の運命を開拓し、光榮ある凱歌を奏せんことを欲せば、御身の強忍、克己、勇氣に訴へてこそ始めて之を期待するに足るといふべし、奮闘の中には苦痛あり困難あるや明かなれども、一旦此の奮闘心を涵養して之を實際に應用するに至らば、其快味は忘れんと欲して忘るべからざる程のものにして、御身の獨立的決心の根底は是に至りて愈〻顯明せらるべきものなり、冀くは眼前の小利と一時の滿足に拘泥して、事物の大局を達觀するの明を誤るなかれ。

三月十八日　父より

"If you have great talents, industry will improve them; if moderate abilities industry will supply their deficiencies. Nothing is denied to well-directed labour; nothing is ever to be attained without it." ——*Sir G. Reynolds.*

第十一信　樂天思想の眞價を敎ふる書

（一）新聞紙上の記事

我が親愛なる秀雄よ、御身は五六日前の『朝日新聞』紙上に於て、前途有爲の一青年が、一時の感情に制せられ、望を人生に絶ち、憂鬱、煩悶の結果として、身を信州淺間山の噴火口に投じて、果敢なき最後を遂ぐるに至りたるの記事を讀みたるならん、此の如き意志薄弱なる子を有せる兩親の不幸の如何程に大なるかは、今更ら申す迄もなき所なれども、予は寧ろ此の一青年の快活なる精神に乏しきを笑はずして、寧ろ彼が平常に於て修養の足らざりし爲め玆に至りしを憐れむものなり、此のこと固より新聞紙の報道に止まりて、

我が一家に取りては何等の關係なきも、御身は此の一例に就ても、失望と落膽の忌むべく恐るべき結果を生ずるに至ることを反省せられしならむ、如何にも煩悶、失望、落膽は、現代青年の流行病なり、彼等は何事に就ても、少しく意に滿たざることあれば、忽ちにして煩悶の情に驅られ、失望、落膽遣る瀬なきの感を起すを常とす、苟も青年にして有爲の才を抱きながら、些少のことに對してすら薄弱なる決心を示すは、平生に於て思想健全に達する修養を缺き、人生に處する着眼點に就て正鵠を失したるに座するものといはざるべからず、男子として最も恥辱に感ずることは、豪膽不屈の精神を缺如し、薄弱の意志に左右せらるゝにあり。

（二）此の中に無限の趣味あり

御身も既に幾多の人々に接見し、又平生予の教誨する所に因りて人生の萬事萬端意の如く自由になるものならざることは十分に知悉せられたるならん、左ればとて斯く意の如くにならざるの故を以て、直ちに望を人生に絶ち、厭世的觀念を起すといふあらば、天下之よりも大なる誤解はなかるべし、古よりして人生を稱して『儘にならぬ浮世』といへり、然れども又記憶せられよ、此の『儘にならぬ』所にも人生の妙味の伏在することを、若し何事も一朝にして自己の胸に浮びたることが直ちに思ひ通りに完成せらるゝものとせんか、生存競爭の必要も感ぜず、精勤、刻苦も何の効果を奏せず、賢愚皆同一の運命を享くるの結果を生ずべし、斯くありては、趣味の津々として盡きざる人生を化して、蕭條寂寞たる殺風景のものとなすに至らん、自然の用意は如何にも周到にして人間の思料すること能はざる所に出づ、此の平板單調を救濟せんがために、困難、辛苦、精勤、奮鬪の必要を

感ぜしめ、人生に處して圓滿に活動せしむるの基を作らしむ。

更に又一方より見るに、最初計畫したることが、到底絶望の外なく、成功の見込なしと信じたることも、時機の熟するに至りては、案外にも理想通りに其目的を達して、人の心を滿足せしむるに至ることの尠なからぬは、予が今更改めて御身に申込るまでもなく、御身が中學時代に於て讀了したる『フランクリン自叙傳』及び其他の立志傳に就て見るも容易に理解せられたるべし、苟くも其目的とする所にして基礎確實に、且つ之を遂行すべき思想の健全ならんには、多少の年月を要するとも、大抵は成功すべきものなり、然るを早くも自暴自棄して、『到底無益なり、斷念の外なし』と斷定を下すは、如何にも淺慮の極にして、人生に處するの道を知らざるの徒と稱すべし。

予は米國に數年間滯在して、其事情を熟知し、且つ同國青年の氣風一般をも十分呑み込み居るものなるが、彼國青年輩は、中々に元氣旺盛にして快活心に富み、忍耐力、決斷力は溢るゝ許りに充實せるを以て、容易に絶望、煩悶の情を起すことあらず、飽く迄も熱心にして頑强に亘る程なり、米國の商工業が日に增し盛大に赴き、國運の隆々として覇を世界に爭ふに至れるものは、要するに同國の青年が斯く迄も活氣滿々として挫折することを知らざるに因るものと今更感服の外なきなり。

（三）天道は人を殺さず

必ずしも今日の青年のみならず、相應の分別心を備へたるものすらも、自己の計畫する所にして意の如くならざる時は、煩悶に至らざる迄も、少くとも失望の念に驅られ、果ては天の無情なるを憾むもの滔々皆然らざるなしと雖も、是れ程迄に心得違ひの大にして、

且つ危險の甚しきものは他に比例なかるべし、自己が窮境に迫るや罪を人生に歸し、天を責むといへども、天は決して人間に對して此の如く不幸を與ふるものにあらず、古よりして『天道は決して人を殺さず』といへるは如何にも適切の語にして、大抵は人自ら殺すに至るのみ、成程失望の極、如何ともすべからざるに至れば、天道の人を殺すものと思料するものもあらんも、斯く失望して自暴自棄に至るものは、自己の罪に外ならずや。

『天は自ら助くるものを助く』とは、歐米共通の金言にして、此の中に無限の眞理と妙味の含蓄することを悟らざるべからず、實際に於ても、困難、窮苦の地位にありしものが、此の一句に對して滿心の確信を表して發憤、精勵して起ちたるため、光榮ある人生の勝利を博し、幸福、快活の人と化したるもの其數多くして指を屈するに遑あらず。

（四）人事を盡さゞるの罪のみ

一歩の道も行かざれば達すること能はず、如何なることなりとも想像のみにて成功し得らるべきものにあらざれば、自己の全力を傾注して、之を大成すべきの決心なくんば不可なり、然るに容易に失望し、容易に煩悶するの人は、斯の如き忍耐力なく、確信力なきの罪にして、斯くては到底生存競爭に堪ふること能はざるべし、是を以て一旦自己が最良と信じたることを遂行するがためには、人力のあらん限りの優良なる法を盡し、此の餘は運命を天に一任し置くべきものなり、人事を盡して天命を待たば、公平無私なる天は、決して人間に不幸を下すべきものにあらず、平生此の心を以て萬事を決せんか、如何に失敗するも狼狽に至るの恐れなく、困難に遇ふも、落膽を來すことあらず。

樂天の思想とは、總て這般の心事を指示するものに外ならず、凡そ人間處世の道として此の以上に出づること能はず、今夫れ之を歴史上の偉大なる人物に徴するに、其爲したる逕路、其社會に及ぼしたる感化は、必ずしも一ならずといへども、然かも自然に信頼し、人事を盡して天命の至るを待つに至りては、悉く其軌を一にして渝らざる所以のものは何ぞや、樂天思想の豐富にして、失望、落膽の念に打ち勝ちたればなり。

（五）天空海濶の氣象を要す

人の世に處するの道としては、常に天空海濶の氣象を以て、愉快滿足の中に事を處理するの決心なかるべからず、些少のことにだも心を苦しめ、思を惱まして、其胸襟を狹少にし、漫りに自ら不安の地に立つは、果して何の益する所あるべきか、無益のことに貴重なる精神を勞して、結局有形無形の損失を招くは、宛かも無益のことのために、貴重の金錢と時間を浪費するが如く、其愚昧の心事たるに至りては、二者の間に大差あることなし、然るに夫れと知りつゝも、猶且つ斯かる空想の奴隷となりて、自ら之を蟬脱すること能はざるは、果して何の心なるか。

御身にして此等のことを十分に理解したる上は、如何に危急の場合に迫るとも、若くは如何程迄に失意の域に立ちたるにせよ、漫りに枉屈して心を痛め、失望、落膽して『到底見込なし、着手するも何の益なし』などゝ斷念して、御身の樂天思想の發達を妨ぐることあるべからず、御身にして何等かの事情に因り、失望、不愉快の念に支配せらるゝ毎に、予の此の教訓を追想して、健全の心を持し、愉快滿足の念を鼓舞せらるゝやう力めんことを望むものなり。

（六）成敗を天に一任すべし

平生に於て度量の宏大を保つことを心掛け、一時の感情、一朝の喜憂の爲めに、希望の光明の放射を妨げざるやうにと全力を盡すは、樂天の思想を保つ上に於て、此上もなき重大のことゝいふべし、況して人生の萬事は、常に變化しつゝ行くものなれば、最初に於て到底見込なしと斷念したることすら、幾程もなくして、自己の思ふが儘に左右し得らるるに至ることは決して珍らしきにあらず、左れば世人より是非の評を蒙るとも之に頓着なく御身として爲すべき義務を盡し、常に最良最極度のことをなし、成敗の如何は、之を天命に一任するの決心を有すべし、是れぞ樂天思想の根本なるものにして、失望の起ることもなければ、煩悶の念にも動かざるゝことなかるべし、縱しや失敗したりとするも、斯くありては、是れ天命なりと諦むるが故に、失敗の中に座するも、猶且つ十分なる慰安を得らるべく、毫も心を苦しめ、思を惱ますに足るものなし、斯くありてこそ御身が眞個の樂天思想を備へ、御身の枉屈なる思想を一變して圓滿、快活に至らしむる基にして、少くとも精神上に於ては成功者たるに足るべし。

（七）平常の樂天思想が最も緊要

人事を盡して天命を待たば、自ら幸福、成功を期せずして自然に之を期待せらるべし、只之を致すに就て御身に取りて最も重大なることは、上來已に縷說したるが如く、平生に於て、不屈不撓の精神を保持し、御身の克己心に訴へて、愉快、滿足、快活心を備へ、如何なる大事の起るとも、此の心を取り亂さゞるにあり、古よりして『蒔かぬ種は生えぬ』

といへるが如く、此の樂天的思想に至りても、偶然にして之を獲らるべきものにあらずして、平素に於て御身の心を巧みに修養し、薄弱、憂鬱の妄想に打ち勝つことを力めざるべからず。

世には自己の苦心にして効果あることもあれど、亦無効に終ることもあり、今御身の爲めに一例を擧けて之を説明せん、御身が或る事業の成功を期するがために、種々の計畫を立つるに就て、何れの道を取りたらば誤りなかるべきか、如何なる方針に出でたらば、失敗を避くるに至るべきかと、其の計畫の完備に就て、御身の精神を凝らし、御身の思慮を勞するは、洵に有益なるのみならず、周到の用意として避くる能はざることなれども、御身が一旦失敗をなし、若くは失望の地位に立つに際して、徒らに前非を悔い、自己の不明を悲み、人事の意の如くならざるを見て、漫然として長嘆の餘り、絶望煩悶して胸を傷むるが如きは、其苦心の効なきのみならず、却て恐るべき害毒を貽すものなり、前者に於ける苦心は、人として凝らすべきの義務あれども、後者の焦心、苦惱に至りては、一身を活動する源泉を斷絶するに過ぎず、小兒の眼より見るも、婦人の眼よりするも、如何にも滑稽と見らるゝの外なし、ヒステリー質の婦人に於ては兎角に此の傾向ありと聞けど、堂々たる男子の身を以て、纖弱蒲柳の婦女子に比せらるゝとは、如何にも面目なき次第にあらずや。

（八）溫き日光に照らされよ

予は又御身が樂天的思想を涵養するに就て有益なる教訓を與へんとす、御身は溫き日光の與ふる力の偉大なるを悟らるゝなるべし、凛烈なる霜雪は、草木をして枯死せしむる

にも關はらず、一旦此の溫き日光に照さるゝ時は、忽ちにして活氣滿々、生氣縱横して面目を一新せんとするにあらずや、悲觀、憂鬱、煩悶の情は、是れ實に精神上の嚴酷なる霜雪にして、樂天の思想は、是れぞ草木の生命を復活せしむる溫き日光といふべし、世人の多くは、溫き日光を喜べども、精神的日光とも稱すべき樂天的思想の涵養に對しては、殆んど度外視するは、予の理解すること能はざる所なり。

以上に叙述したるが如き覺悟は、凡そ人として此の世に生活するものには、何人も其必要を感ぜざることなけれども、予は御身の如く今より實業社會に入りて經歷を始めんとするものに取りては、層一層に其痛切なるを信ずるものなり。

蓋し實業界の如きは、今更予の申し送る迄もなく、波瀾の動靜定まりなきものにして、到底器械的に之を豫測すること能はざるが故に、此の如き周到なる大決心を抱いて懸らずんば、少しく大事件の起り、思考力を要する毎に、煩悶、失意の念に驅られて如何ともすべからざる苦境に陷らんか、到底事業經營の任に當るべからざるは、容易に想像せられ得べし、現に予の知人にも、本年の株式市場の大活動に伴ひて、一躍して數十萬圓てふ巨額の財産を作り得たりし迄は、天下無比の幸運兒なりしも、爾來市場の不振に從ひ、株式の大下落を來すに至るや、彼は已に儲け得たる財産のみにては、到底其損失を償ふこと能はざる程に巨額の負債ある身となり、始めて槿花一朝の榮より醒めたるも、餘りに巨額の失敗なりしため、之を償却すること能はずと見込みを附けたるにや、忌はしき方法にて自殺を遂げたりき。

（九）投機は最も危險のことなり

然るに新聞紙も、世間の人も、彼が此の自殺を遂げたるは、疾病の爲めに卒然として永眠したるものゝ如く傳へたるを以て、予と彼の家族のものを除くの外は、誰しも其眞相の存する所を知らざりしは、不幸中の幸ともいひ得べきか、株式の如き投機市場に出入して、眞面目の事業を放棄するは、カーネギー翁が、『實業の帝國』に於て、熱血を濺いで訓戒したる所にして、御身の己に熟知せらるゝ如く、決して着實の軌道を蹈むものと申され難し、從つて自ら危險の域に闖入したるや明かなれども、左りとて相應の地位を有するの人にして、斯くも淺ましき最後を遂ぐるに至るは何故ぞや、畢竟するに、人事を盡くして天命を待つべき樂天思想を喪失せるものにして、事業界に立たんとする御身に取りての好教訓なり。

左れど如何に有益なる此の樂天思想も、之を悟ること晩からんには、何等の益なきものなれば、御身の如き青春時代よりして、絶へず此の思想を涵養し、如何なることありとも、之を脱離することなくんば、常に愉快、滿足の中に逍遙し、安んじて一生を送られ得るに至るべし、苟くも斯の如き周到なる用意ある人にして、猶且つ失敗ありとするも、其未だ甚しきに至らずして、之を防止し得るに至るや必せり、是れ實に樂天思想を有する人に對して、特殊の天惠とも見るべきか。

予は殊更ら惡しき實例を引き來りて、御身に不愉快極まる所感を起さしめんとするにあらず、否此の如きは、予の本意にあらずと雖も、御身が將來の幸福を增進せんことを祈り、御身の成功を奏せんことを望み、御身の生氣滿々たる快活心の永續せんことを期するの餘り、區々の情よりして此の言をなすのみ、予は御身が此の教誨の眞意を諒して、將來に於て勵精一番して、常に樂天思想を以て、赫灼として御身の周圍に光彩を發せんことを切

望するものなり、時下春風嬝々、桃花瀾漫として天然の妙趣を發揮す、最も是れ樂天思想を涵養するの好時節なり、幸ひに自重せられよ。

五月六日　父より

"A peace is of the nature of a conquest; for then both parties nobly are subdued, and neither party loser." —— *Wm. Shakespeare.*

第十二信　休養の重大なるを敎ふる書

（一）是れ不注意の結果のみ

我が親愛なる秀雄よ、御身が去る二十日を以て投函したる信書は、本日を以て恙なく予が掌上に落ちたり、予は御身の書簡を披見して、御身が此の數日來病床に呻吟し、日夕懊惱すること尠なからぬことを知りて、驚愕したるのみならず、此の疾病が御身の過度の心勞より出でたることを聞きて一層悲嘆の感に堪へざるものなり、予は御身が最良の醫師の診斷を乞ひ、一日も早く全快の報に接し父をして安堵の念をなさしめんことを祈るものなり。

予は平生御身に向ひて身心攝養の決して等閑に附すべからざることを反覆し、御身の怠りなく實踐あらんことを求めしに、御身は深く之に意を用ふることなく、容地に於て病魔の犯す所となるに至りては、是れ必ずしも自然に發生したるものにあらずして、御身が予の教誨を遵奉せず、又攝養を怠りたるの罪に出でたるものと推測せらる、幸ひにして大患に陷らざるは、不幸中の幸なれども、御身は此の實物教訓よりして、今後に於ては、嚴に攝養を守り、常に健康と快活を保つべきことを期せざるべからず。

（二）寧ろ怠惰漢の本色

御身が平生に於ける動作に徴するに、一旦何事にか熱中するときは、徹夜するも辭せずして之を完成せんを期し、又然らざるの時に於てすら、朝來暮去机邊を離れずして、一心不亂に自己の好める所に耽けるを常とするが、此の如きは眼識なき愚昧漢よりすれば、左も精勤家、奮闘家らしく思はる、然れども予の見る所に因れば、之と全然正反對にして、規律を重んぜざる怠惰漢といふの外なし、御身は恐らく此の批評に對して父上に似合はざる過酷の言をなす人なりと想像せらるゝやも計られず、左れど予は決して斯の如き惡意に出でたるにあらずして、全般を通じての觀察より此の結論を下すに過ぎず、誤解せざらんことを祈る。

二六時中間斷なく働らき、一時間といへども休息する所なきの人は、成程如何にも勤勉家、奮闘家らしく思はるれど、人間の精力には大抵限度あるものなれば、此の如きことが永續し得べきものにあらず、若し夫れ强て之を持續せんとするに於ては、忽ちにして身體を害し、健康不良となりて、輕きは數日に亘りて執務中止を要し、重きに至りては、病魔

の爲めに犯されて身體の自由を失ふに至るべし。

（三）執務に就ての秩序

若し夫れ之に反し、一定の規律を立てゝ一定の時間の中は全心を傾注して、奮闘、精勤すべきも、一旦規定の時間に達すれば、直ちに之を中止して、身心の清快、慰安を得べき方法を講ずることあらんには、一日の疲勞は之に因て忽ち消散し其影だに留めざるに至るべく、而して翌日に至れば、精神全く清快となり、宛かも迅雷疾風の後に快晴を見るが如く、捲土重來の新意氣を以て事に當るが故に、事務の解決に於て一絲亂れざるのみならず快速、敏活の勢を以て之を處理して毫も誤ることなきに至るは、眞に至當のことにあらずや。

此の故に一日の中に於て八時間を執務のために當て、他の二三時間を割きて休養に當つるものと、一日の中は間斷なく執務をなし、一時間だに身心の慰安、休息をなさゞる人とは、其結果に於て一大差別あり、固より僅々四五日乃至二三週間の間ならば、前者よりも却て後者の方こそ大なる効果を奏し得べきも、此の如き無理なる心身の勞役は事實上永續せざるを以て、結局は前者こそ後者に對して一大勝利を收め、事業に於て多量のことをなして、奮闘、精勤の實を擧ぐるに至らむ。

（四）適切を忘るゝは愚なり

凡そ何事に論なく、適切を忘るゝ人に對しては、共に事理を談ずるに足らず、適度を忘るゝは、是れ極端に失するの謂にして、身心の上より見れば、自己を虐待することに當る

なり、自己の身體を自ら虐待するとは、如何にも奇怪のことなれども、休養を知らざるものに取りては、此の如き結果を招致するに至るなり。

御身は平生よりして强健人に勝ると申す程にあらざれど、左りとて薄弱、蒲柳の質といふ程にあらず、凡そ人間普通の體質を有するものならば、攝養を守りて心身の强健を保ち得ざるの理あらず、今代の人々が學業僅に成りて夭折を遂ぐる所以のものは、先天的に薄弱の體質を有するといはんよりは、寧ろ平生に於て、規律ある執務、秩序ある休養を取らざるに出づるの罪なり、一言以て之を掩へば、勞働のみを考へ、休養を忘れたるに坐するのみ、斯くては鐵石にあらざる身體が如何でか其健全を保ち得べきか、試に思へ、鋼鐵製の堅牢なる器械といへども、時ありて油を注がざれば、其圓滑自由なる運轉力を失ふに至るべきを、人間としての休養は、恰かも器械に油を注ぐと同一の理にして、一日といへども忽にすることを得ざるにあらずや。

（五）休養を講ぜざるの結果

御身が先頃よりして實務上の見習をなしつゝあるは、予の尤も喜ぶ所なりといへども、御身が平生に於て身心の攝養を無視し、若くは之を閑却して一日に一回だも休養を爲さず一室の中に蟄居して、坐業以外に何等の慰安を求めざるが如きは、是れぞ御身が殊更ら身體を薄弱ならしめ、且つ疾病を買ふに至りたる原因にあらずや、予は固より精勵を愛するものなれども、身心を不健全に導きて迄も過度の勞役に服するが如きは、斷じて取らざる所なり。

今後に於て生存競爭は愈〻激甚となるに至るべく、實業界と政治界とに論なく、精力の

絶倫なるものこそ常に競爭に打ち勝つを以て、結局の問題は健康の如何に歸着せざるを得ず、如何なる人も自己の身心の健康を無視して此競爭に加はることを得ず、何事を企畫するに於ても身體は根本的條件にして、事業は第二なり、諺にも『生命ありての物種』と言はるゝにあらずや、然るに御身が平生に於て此の點を殆んど閑却するは、御身の將來の活動を期する所以にあらず、『働くことのみを知りて遊ぶことを知らざるこそ愚物の頂上なれ』といへる歐米の俚諺は確かに其當を得たるものといふべけれ。

（六）先哲、偉人の休養法

古今の偉大なる人物が、社會に立ちて顯著なる功績を奏したる所以の跡を案ずるに、其裏面には必ず勞役に對する適度の休養の伏在したるを見るべし、彼等は一定の執務を終るや否や、全然休養のために一心を傾注して、殆んど他を忘れたるが如し、英國の偉人グラツドストーン翁が、繁激無比なる政務に忙殺せられしに關はらず、一定の時間に達するや否や、溫き日光に曝らされ、清新なる室外の空氣を呼吸することに務め、或は邸内の樹木を伐り倒し、或は綠樹蓊鬱の間を逍遙するを無上の娛樂にしたるを以て、長壽を保ち得たるは申す迄もなく、晩年に至るまで、意氣快活に、身體强健にして青年を凌ぐの概ありしもの洵に故あるなり。

御身は予の教誨に從ひ前大統領ローズヴェルトの著書を此の頃繙讀しつゝあるを以て、其性行を十分に知悉せられしならん、氏は平生天下の重任を雙肩に擔ひ、其政務の非常に多忙なる到底御身の想像以外に屬する程なれど、一旦公務を終るや或はオイスター、ベーにヨットを浮べて家族と共に閑日月を送り、或は深碧滴る許りの青芝の上に於て、ロンテ

ニスを試み、或は長亭短驛の間を旅行して、積日の疲勞を慰むるが如き、一として休養の活法を利用せざるなし、氏が精力の絶大にして凡人を凌ぎ、其快活、雄大、强健の意氣を以て、山なす繁激なる政務を裁決して流るゝが如きもの、今代青年に對して、休養上の模範を垂るゝものにあらずや。

（七）休養の六大要件

御身の如く一事に對して熱血を注ぎつゝ毫も他を顧みざるは洵に嘉みすべきの至りなれども、間斷なく之を實行するに於ては、必ずや身體と精神をして活氣を缺かしめ、營養不足、神經質、不眠症に罹ることを免れざるものなれば、一定の時間を期して休養を謀るべき道を講ぜざるべからず、予が今御身に申述べたる偉大なる人物の休養法の如きは、眞に用意周到なるものなれば、御身の之を實行するに於て、何等の困難を感ずるものにあらず、予は御身に對して、平生に於て遵奉せられんことを望むべき休養法の中、最も重大なるものを說明すべければ、全快の身となりたる曉は、直ちに之を實行して遺憾なきを期するやう祈るものなり、即ち

（一）出來得る丈け早朝に起き出でゝ冷水浴或は冷水摩擦をなし、朝飯前の二時間位は少なくも近郊を逍遙して、清鮮の空氣を呼吸せられよ、斯くて漸く空腹を覺えたる頃に始めて朝飯を爲すべし。

（二）午后四時乃至五時頃よりして、執務を終りたる時は、御身の頭腦を疲勞せしむべきことを一切避けて、或は花卉を植ゑ、或は野外を散策し、或は舟を浮べて垂釣を樂むべし。

（三）晩餐後、一二時間は、非常に疲勞を感ぜざる範圍内に於て、或は散歩をなし、或は友人の家を訪問し、若くは御身の愛する音樂を彈ずるも可なり、出來得る限りは郊外逍遙をなすべし。

（四）就眠前には苦痛を忍んで、冷水浴を行ふか若くは冷水磨擦を行ひ、且つ輕便なる室内運動器を利用して、體的運動を怠ることなかれ、然かも之がために就眠の時を遲延することなかれ。

（五）何事をなすにも總て規律正しくし、放任、怠惰、不規律を排し、時間の來ると共に、一定の處理をなすべし。

（六）日曜日の如きは、出來得べくんば、山野を跋渉し、或は遠足などを試みて、全日を休養に費すことを辭すべからず。

（八）精神の娯樂と愉快

以上は御身の身體にても十分に實行せられ得べき事項にして之がために如何程迄に御身の愉快、娯樂を增進すべきか殆んど計るべからず、こは是れ決して一場の空論にあらずして、予が既往二十五六年來實驗し來りて、有益の成蹟を擧げたるものなれば、御身とても之を實行するに於ては、予の享受したると同一の結果を齎らすに至るや必せり。

尙一つ御身に申送るべきことは、休養とは必ずしも身體の疲勞を慰め、之を休息せしむるの謂にあらずして、之と同時に精神の娯樂、愉快を圖ることも忘るべからず、如何に身體を休息せしめたりとて、之よりも更に重大なるべき精神の休養を沒却することあらんには、何等の益なきのみならず、其不良の影響を蒙るべきことは、體的休養を無視すると同

一に當るべければ、此の一事に注意あらんことを望むや切なり。

さて又此の主意よりして、日常精神の沈着にして愉快を增進せしむる工夫を謀り、之をして不快、昏亂、憂鬱に亘らしむべき總ての行爲を嚴に排除せざるべからず、精神の娛樂を缺き、不愉快なるがために、身體をして薄弱、多病、神經質等に化せしむることは、今更ら決して珍らしきことにあらず、現に予が友人の子弟にも、精神的病患のために、身體をして薄弱ならしめ、終生に亘るべき憂鬱、煩悶の身たらしめたるの實例の極めて多きを知るなり。

（九）職業以外に興味を求めよ

精神をして娛樂、愉快を得せしむる方法に就て、御身のために之を說明せんか、御身の關係せる業務と全然異れる方面に於て、何等か興味ありと感ずることに心を寄せ、其の間は妄念邪思を排して專心之を樂むにあるをいふのみ、今一層明白に之を叙說すれば、勞働に從事するものは、文學、美術の如きものに對して心を樂ましめ、文學、美術、商業に從事するものにありては、是れ亦之と關係なき植物培養、寫眞術研究の如きことに心を注ぎ、之よりして無限の娛樂と愉快を見出すに存することをいふなり、斯く無邪氣のことに忙中の閑日月を樂むことは、是れぞ心神の和氣、娛樂を增進せしむる所以にして、之に因て積鬱を散ずべく、之に因て高尙なる趣味を養ふに足るべし、自己の職業を尊重し、之に對して全力を傾注するは、勿論嚴守すべき義務なれども、精神休養上の良趣味を悟らざるの徒は、如何にも乾燥無味にして、人生の妙趣を談ずるに足らず。

（一〇）能く面目を一新すべし

御身にして予の指示したる教誨をば、日々實踐躬行して遺憾なくんば、單に之に因て御身をして强健無比の人たらしめ、疾患を中途に斷絶すべき基をなすに止らず、御身をして常に清新、快活の氣象を持して、光明の新天地に逍遙し、事務の處決に就ては敏活に、人に對して、圓滿快活にして、他人の同情、信任を博するに足るべし、又之と同時に御身は如何なる時にても、餘裕綽々として毫も拘束せられざる光風霽月の襟度を抱くに至らん。

一日の中にて僅に二三時間を割きて、身心の休養を圖ることあらば、御身は必ず身體精神に於て强健無比の人として他人より羨望せらるゝに至るは言ふ迄もなく、面目を一新して、殆んど別人たるの觀を呈すべけん、事茲に至らば、御身が將來に對する成功、立身の光明は、赫灼として輝き渡るのみならず、豫想外の好成蹟を奏するに至らんことは、予の確信して疑はざる所なり、予は御身が將來に對する大成を望むの餘り、煩雜を厭はずして予の深く信ずる所を述べて御身に寄せたるのみ。

本日予は一商店よりして、御身が室内運動用具として、「チエスト、ウエート」一個、並びに「エキサーサイサー」一組を小包郵便に托して送附し置けり、暇ありても戸外運動をなすこと能はざる時には、常に此の新器械を利用して休養の一端に資せんことを望む、時下寒暖不順、乞ふ一層の攝養を加へて、速かに全快を期せられよ。

五月九日　父より

"For the bow cannot possibly stand always bent, nor can human nature or human frailty subsist without some lawful recreation." ——*Cervantes.*

第十三信　外國語研究の要訣を說く書

（一）意外なる拙劣の文章

我が親愛なる秀雄よ、御身が本月六日を以てハリファックス氏に宛て〻送りたる英文の書簡は偶然にも予が昨日同氏と面談せしに際し之を一讀して、御身が英文に對する眞價を判斷するの機を得たり、右の書簡を閲讀いたす迄は、御身は英文特に英語の書簡文に懸けては、自由自在に書き下し得るものと思ひしに、豈に測らんや斯くも拙劣なるの上に、意味さへ十分に判明せざる文を書するとは、如何にも殘念の至りならずや。

ハリファックス氏も予に對して御身が書簡の意味の明瞭を缺き、筆蹟の拙劣なるに對し

て今一層修養せらるゝやうにとの注意を與へられたり、予は同氏の注意の周到にして且つ其親切の情に對しては鄭重に感謝の意を表し置きたるも、予は單に其の儘に打ち棄て置きては、御身の爲めに良からざることと信ずるが故に、腹藏なく予の所見を披瀝して、御身の今後の參考に供せんと欲す。

（二）高尚の讀書のみにては益なし

御身が從來予に語る所に因れば、「兒は已に沙翁の戲曲、ミルトン、ドライデン、テニスン、ロングフエローの詩賦に通じ、ジョンソン、スコット、マコーレー、カーライル、エマースンの諸文集を愛讀し、高等の文藝に屬する古今大家の書籍は、大抵窺はざる所なし」といひ、若くは『兒は遠からずして日本財政の將來に就て英文にて記述せん』などゝ、屢ば予に語られしが故に、斯く迄も深奥の素養ある以上は、日常普通の往復文の起草などは、極めて容易の業たるべしと信じたりしに、ハリファックス氏より示されたりし御身の書簡を一讀しては、御身の英文の素養に乏しく、實用に適せざるものあるを見て、失望の念の轉々胸中に起らざるを得ざりき、第一に御身の英文は文法に協はざる所多き上に、漫然として必要もなき故典、熟語などを多く挿入せるのみならず、其主旨すら一向分明ならざるは如何なる考慮なるにや。

且つやハリファックス氏の言に因れば、御身の英語會話は、餘りに學者的に、餘りに文章的にして、日常普通の用語に通ぜざるのみならず、同氏が發したる質問の要領すらも了解し得ずして、全然無關係の答辭をなしたりとのことも併せて之を聞き及びたり、重ね重ねの御身が語學修養の未熟にして失敗のみを演じたるには、同氏の面前に於て予は思はず

冷汗を禁ずる能はざりき。

（三）誤解したる語學の研究

熟々思ふに、御身は語學の研究方針に於て根本よりして誤解をなすものなり、御身は高等の文藝にさへ通曉すれば、其他は容易に通曉し得らるゝが如く吹聽せらるゝも、第一に御身は日常必須の英文書簡さへ滿足に書き得られず、又普通の會話さへも用を辨ぜざるにあらずや、獨り御身のみならず、今日の青年にして、御身の年輩頃のものは、何れもシエークスピーヤ、ミルトン、テニスン、エマースン、カーライルの詩文を論評するも、實用向きに懸けては一向に役に立たず、斯くては外國語を研究したりとも、何等の効を奏せざるものにして、畢竟は虛飾に終るべきのみ、予が御身をして外國語を研究せしめたる主旨は、決して虛飾的に道樂半分の玩弄物たらしめんとするにあらずして、御身の一身に取りて活用せられんことを望みしのみ。

今後御身は實業界特に外國貿易業に立ちて全力を傾注せんと欲する以上は、語學の研究は一日といへども廢すべからざるものなれど、御身が從來取り來りたるが如き方針は、今日よりして斷然として廢止し、直に新なる思想と新なる方針を以て進まざるべからず、然らずんば、外國語を研究したりとするも、果して何の用をかなさんや。

（四）實利實用を第一とす

予が新方針として御身に告げたきことは、實利實用を專一とする現行の英語の研究（the study of current English.）にして、先づ日常尤も必要を感ずる往復文より始めざるべから

ず、高等の文藝に關する英語の智識が必ずしも無用なりと申すにあらざれども、こは是れ實用的英語の使用法の自由自在となるに至りたる上の話にして、刻下の必要にあらず。

御身は書簡文の如きは極めて平易にして左程苦心を要するものにあらねば之を專攻するが如き誠に、馬鹿氣たる次第なりと思料するならむ、斯かる思想が已に根本に於て誤りと申すものなり、實務其者に於て何等の豪傑風の處理を要するものなしと雖も、世人が見て尤も普通のものなりと思ふことを巧みに然かも敏活に處理するこそ實務の目的とする所にして、御身が明日よりして早速に必要を感ずるものは、此の一事に存することを忘るべからず。

大學教育を終へたる青年にして、滿足に英語の書簡文を書き得るものは極めて尠しと申したらんには、御身は意外に感ずるやも知らざれど、こは動かすべからざる事實なり、現に予の知己なる十八名の大學卒業生中、英文書簡らしきものを書き得るものは僅かに一名に過ぎず、然かも是れ怪むに足らず、彼等の多くは、實用に緣なき小說、戲曲の研究に重きを置き、キプリング、メレヂス、メーテルリンク、ドイルの文章を批評すれど、實用を主とする書簡文に於ては、全然之を等閑に附し、碌々之に筆を染めたることなければなり。

(五) 彼の失敗したる理由

先頃のことなりしが、此等青年の中の五人は學士の肩位あるがため、日本屈指の某大會社よりして、雇入れられんとしたりき、彼等は非常に喜びて、一日も早く採用あらんことを求めしが、重役の一人が、初對面の當時、先づ彼等の實用的英語の智識を試驗せんがために、二三頁に亘るべき書簡文を認めしめたるに、彼等は之に堪へ得ざりしにや、俄かに病氣

と稱して、退出し、僅に一人のみ止まりて答案を作りしも、それすら極めて不十分なりしかど、重役は此の青年のみは、多少の練習を重ねたる上は、猶上達するに至るべしとの見込を附けて之を採用したり。

此の如く眼前に有望の好機會あるにも關らず、實用的英語の素養乏きの悲しさ、之を逸し去らしめ、却て名もなき小僧上りの夜學校の卒業者をして、幸運の寵兒たらしむるといふに至りては、返すがへすも殘念の至りならずや。

御身は記憶せられよ、書簡文起草は實用的英語研究中に於て重大の地位を占むるものにして、殊に將來に於て實際社會に入らんことを欲する人々に取りては、之が修養の一日といへども捨つべからざるを感ずるものなるを、換言すれば實業的成功の端緒は、英文にて書簡を巧みに起草するにありとまで申しても、決して誇大にあらざるを信ずるなり。

今若し御身が外國人と取引をなすべき實務家として打て出づるものと假定せんに、御身にして如何程深く古今大家の詩文に通曉せらるゝとも、取引に要すべき手紙を自ら書き能はざるやうにては、果して如何に敏活の取引をなし得べきか、斯く申せば、御身は必ず平生の氣質よりして『否とよ、兒は英文に通ずる書記を雇ひ入れて巧みに之を處決し、滯滯する所なきに至らしめん』と答ふるならむ、此の如きは新進有爲の實務家として爲すべきことにあらず、況んや雇人に一任して自ら親しく手を下さゞることは、他日失敗、誤謬の起りたる場合に重大の責任を帶びざるべからず、加之世上往々意外の損害を蒙るに至るべきことを目擊したれば、極めて不安心のことゝいふべし。

（六）意志の疏通を缺くべし

又英語の會話に至りても其の通りなり、御身が如何程高尚なる經濟學、財政學に關する名家の著書を渉獵せらるゝとも、苟も御身にして、實地應用を主とすべき日常の會話を善くすること能はずんば、實務家として何の取るべき所あらんや、自ら外國人と取引すべき衝に立ちながら、よく外國語を談ずること能はず、僅かに通譯者を介して、自己の思想を通ずるとありては、宛かも靴を隔てゝ痒所を搔くと一般、到底思ふ存分のことを述ぶること能はず、之がために延て意思の疏通を缺き、結局は金錢上にまで一大損害を受くるに至ることは、世上に往々有勝ちのことにして、殊更取立てゝ言ふ迄もなし。

御身は日本語にて談話するときは、予が再三の訓誨にて注意したりと見え、餘程明快となりて、何人にも善く聽き取られ得るにも關はらず、英語にて談ずるときは、舌端緊束せられて、僅に一語一句さへ補綴するの觀あるは、極めて不體裁なるのみならず、外國人に對して御身の言はんとする意志を通ずること能はざらしむ、思ふに御身をして斯の如きに至らしむるものは、御身が語學に就ての才幹を缺きたるに因らずして、寧ろ御身が平生に於て修養を誤りたるに出づるのみ。

（七）非常に不自由を感ずべし

今御身が讀む所のものは、古今大家の詩文なれど、極めて必要にして平易なることすら自由に語ること能はずとありては、單に實務に迂濶なるのみならず、御身の上より見るも極めて不自由のことなるべし、之すら悟ることなくして、英語の會話を輕々視し去るといふに至りては、予は御身のために之を悲しまずんばあらず。

御身は自ら實務家を以て任じながら、高尚にして一部少數人士の用ふる詩文のみ如何に

も大切にして、其他の卑近のことは、取るに足らざるが如く考慮を廻らすことあらば、是れ眞に實業的徑路を蹈むものに就て非常なる誤解なり、速かに斯かる障害的思想を排除するやうに力めざるべからず、之を世間の實際に徵するに、人生に當りて尤も利用多く且つ適應の範圍の廣きものは、高尙にして深遠なる學問にあらずして、却て通俗、卑近なるものに外ならず、蓋し前者にありては、之が便利、適應を感ずるの人極めて少數なるも、後者にありては、如何なる人なりとて、之が必要を見ざることなければ、何れの方面にても其需要を見ざることなし、而して結局人生に於て最後の勝利を博するものは、此の實用的にして通俗卑近のことに存するものなるを記憶せられよ。

（八）世上尤も必要のものは

此の意味よりして、商業取引上に於て直接に便利を感ずるものに、簿記の如き、算術の如き、英語にても書簡認め方、會話の如きもの皆な然らざるはなし、實務の處理は、學窓にて學理を論ずること〻同一に見做すべきものにあらず、從つて學校時代に於て輕々に附し去りたる事が却て重きをなすは、不思議の如くして實は不思議にあらず、そは御身が平生研究せらるゝ經濟學の原理中に說明せらるゝ如く、需要供給の法則に因りて支配せらるればなり、世上幾多の青年が、學校時代に於ては優等の成蹟を以て卒業したるものも、社會に出でゝは、意の如くならざるのみならず、却て意外にも苦々しき失敗の經驗を嘗むるに至るものは、全く之を看取せざるに出づるのみ、一日丈け此の理を看取して之を實行するに敏ならんには一日丈け早く成功を收むる所以にして、是れぞ御身をして幸福を捉ふるの端緒を開くものなり、一生を終るまで此の理を觀破すること能はず、依然として舊套

を慕傚し、毫も改むることを知らざるものは、一生を通じて、不幸、失敗、蹉躓に因りて圍繞せらるゝや言を俟たず、是れ豈に着眼すべき最大の事項にあらずや。

（九）最新の智識は活用が主眼

思ふに外國語を研究するの目的は、人々に因りて悉く一致するものにあらずといへども、其萬人に共通のものは、自由に自己の思想を言語、文章の上にて表示し、實地の活用を主とすべきことに存す、況んや身を外國貿易界に投ぜんとするものに於ては、殆んど世界語とも見做されたる英語の活用をして自在ならしめずんば、寶の山に入りつゝ手を空ふして歸ると一斑、何の益する所なし、希臘、羅甸の語學を研究するものは、人之を呼んで『死語の研究』と稱し、實用に緣なき人として見做さるゝが、若し御身にして、活用の範圍の廣き英語の研究をしながら、單に文藝的に偏して、實用的方面を沒却するあらば、希臘、羅甸の語を學ぶと毫も擇ぶ所なし。

最新の智識と最新の思想は、最近の文字を以て書きたる外國語研究の賜物なるにも關はらず、若しも流麗、華飾の文字を弄せる時代後れの書籍にのみ耽りて實地的、通俗的研究を忘却することあらんには、御身は一日といへども、此の恩澤に浴し得ざるべし、又激甚なる競爭場裏に處して成功を奏し難きは勿論のこと、却て折角の計畫をして水泡に歸せしめ、人後に瞠若たるに至るべし。

（一〇）下聞を耻づるに及ばず

以上指示する所に徵して、御身が從來の外國語研究方針の根本より誤れることを釋然と

して大悟せられたるなるべし、予は切に御身が今日よりして、舊思想を一新し、新しき思想、新しき考案を用ひて、實地的語學を研究し、之を活用して自由自在の域に進まんことを望むものなり。

然れども如何なる語學に論なく、獨學は決して十分の効果を見る能はず、故に御身に對し、良師なくして、之を攻究せよと勸告するは、無理の注文なるが故に、本日を以て予が知人なるホール氏に宛て、御身の語學研究に就て十分に教養するやう依賴狀を發せり、同氏は久しく英國マンチエスターの商業學校に於て教鞭を取りたる經驗あるが上に、極めて鄭重、親切なる紳士なれば、御身は明後日を期して同氏を訪問し、其の教を乞はゞ大に利する所あるべし。

又御身は下問を恥づるの僻あれど、是れ甚だしき間違なり、御身が理解し能はざることあれば、鄭重の禮を以て質問を試み、十分御身の腑に落つるやう致すが大切なり、不得要領の中に埋沒することあらば、何日を經過するとも決して眞個の理解をなし難し、御身は此の點に就て細大漏さず注意を拂ひ、他日の悔悟を遺さゞるやう奮勵し御身の語學的修養をして一大光彩を放たんことを心懸けられよ、語學研究の秘訣は決して以上にて盡きたるにあらざれど、之に因て其大體を窺ひ得たるべし、本日は止むなき用務を帶びて多數の人と接見するの約あるを以て、遺憾ながら玆に擱筆す。

七月三日　父より

"A man who is ignorant of foreign languages is also ignorant of his own language." ——*Goethe.*

第十三信　外國語研究の要訣を說く書

第十四信　實務處理の眞髓を說く書

（一）注意と緻密の念が尤も大切

我が親愛なる秀雄よ、御身は今や漸く敏活なる實務社會に入りて練習を始めつゝありと聞き、予の衷心よりして至大の滿足を覺ゆるものなり、只此の上は一日も早く御身の關係せる業務に精通して、實務家として偉大なる成蹟を收め、斯界に立ちて嶄然として頭角を現はさんことを切望する也。

實務經營の端緒に於て、練習を重ぬることの最も有要なるは、予が御身に申し送る迄もなく、御身に於て十分に知悉せらるゝ處ならんも、之と同時に注意と緻密の念の伴ふことなくんば、何等の効果を奏するものにあらず、如何に偉大なる實務家なりとも、此の二大要素を缺くに於ては、必ず事業上の失敗若くは蹉躓を經驗せざるべからず、否、偉大なる實務家となればなる程、此の點に就ては十分に警戒を加へて遺憾なきを期するを常とす。

凡そ實務の經營に於ては、何等の豪傑的調子なきものなれば、何處迄も眞面目を旨とし、注意と精密の念を脫するなきを要す、然らずして頭腦の疎放杜撰に任せ、事に當りて輕卒、豪放の意氣を以て、實務の衝に立つあらば、必ずや一大失敗をなすに至るべし、蓋し何れの點より見るも、算數に基きて、精確、周密を要すべきものなれば、此の觀念なくして、實務處決の上に於て成功を期せんとするは、根底よりして誤れることなるべく、玆に絮說を加ふるの要なし。

（二）簡潔の活法は注意にあり

更に又一方より見るときは、實務處理に要する簡潔なるものは、注意の結果にして、勞力の結果にあらず、注意と緻密の念を以て、實務に當るに於ては、期せずして簡潔に達し得らるゝものなり、注意の缺乏は、智識の缺乏よりも恐ろしき弊害あり、賢良の人にして若しも注意の缺如することあらんには、智識の乏しき愚昧漢よりも甚しき失態を見るに至るは珍らしきことにあらず。

實務的才幹が、實務處理の上に於て最も重要なるは申す迄もなけれども、縱しや之ありたりとて、注意力と緻密の思想の並行することなくんば、折角の經營をして水泡に歸せしむべし、世に才學兼備の青年にてありながら、實務社會に入りて意外の失敗を見るに至る所以のものは、實は此の注意と緻密の伴はざるに坐するものにして、御身の今後に取りて、十分參考として記憶を要すべきものならずや。

算數の計上を誤り、若くは商品の仕入れ、帳簿の記入等に於て遺漏を來すが如きは、經驗の足らざるに出づるといはんよりは、寧ろ如上記述せるが如き綿密なる注意を缺きたるの結果に外ならず、御身が今實務社會に入りて實習を重ねつゝあるは、斯く重大なる注意力を訓錬せんとするに過ぎざるべし、若しも御身にして此の點に心を留むることなく、萬事他人の命令の儘に働きさへすれば足れりと思ひて、輕率疎放の思想を一洗することなくんば、御身は何れの日に至るも、成功の要素を築く能はず。

今代青年の一大弊風とも見るべきものは、事を處理する上に於ても、僞學的、誇張的筆法を弄するにあり、講堂にて議論を戰はしたる既往の乳臭的口吻は、實務社會に入りたる

後に於ても、依然として一洗せられず、何處迄も尊大に構へ、倨傲の氣風を示し、上長者に對しても顧客に對しても、自己の學殖の豐富なるを誇示せんとするの色あり。

(三) 兒戯に類する行爲ならずや

是に於てか少しく面倒にして頭腦を勞すべき問題に接するや、忽ちにして事務の重く苦痛なるを嘆じて、眞面目に之を處理せんとすることなし、然かも知悉せざること迄も得々然として公言し、他人の迷惑となることすら顧みざるに至りては、其弊實に言語に絶するものといふべし、實務的成功を欲するものにして、斯かる兒戯に類する行爲を得意らしく演じたりとて果して何の見る所あらんや。人生の實驗を重ねず、又櫛風沐雨の辛酸を經ざる迂濶漢に取りては、見て以て『如何にもエラキ人物なり』若くは『實務家に類なき學殖ある人』として驚嘆すべけんも、此の如き青年の行爲たるや、其實は實務的才幹の缺乏せるを表明せるものにして、向上發展に志ある人の謹んで避くべきことなり、之がため他人に迷惑を懸くるに至るは言ふ迄もなく、實務の處理に對して敏活を缺くこと甚し、競爭激甚なる今日の實務社會は、斯かる迂濶にして、實用に緣なき輩を容るべき程に閑散にあらざるのみならず、之を容るゝの餘地あるを見出さゞるなり。

御身は如何なることありとも、此かる迂濶にして無用の徒に倣ふことなく、御身の責任に屬することを悉く處理し、猶多少の餘暇あるに於ては、更に一歩を進めて其以上のことをなすに躊躇するなかれ、御身が實務のために忙殺せられつゝあるは御身に取りて無上の光榮と申すものにて、毫も嘆聲を洩らすに及ばず、左れば御身は實務の處理をなすの時は、眼中實務の外に餘念なきを期し閑談などを試むべからず、執務中に於て實務以外のこ

とを談ずるは、實は執務に精神の入らざるの證據にして、談話する丈け夫れ丈け注意力の漏洩あるを證明する也。

（四）實務家の疎放は感服し難し

御身が、實務の處理をなすの時には、英雄閑日月あるの態度を示すに及ばず、實務は何處迄も眞面目の處理を要するものなれば、平凡的調子を帶びたるこそ當然のものにして、之に違背するこそ常軌を逸したる所爲と稱すべけれ、實務家として此の如き疎放の風を帶ぶるは決して賞むべきことにあらずして、實は最も禁戒すべきことゝ記憶せらるゝを要す、是を以て若しも御身が實務處理のために忙殺せられて、他を顧るに遑あらざるの結果、愚昧漢なり、痴鈍漢なりといふものあらば、御身は默して此等の批評を甘受するを要す、斯く批評せられたりとても、御身の眞價が下落するといふにあらず、又御身の才幹の發達に妨害を與ふるといふにもあらずして、何等の痛痒を感ぜざるべし、斯かる批評を蒙りたるために、御身の神經を刺激することあらば、是れぞ御身をして實務練習の好機會を逸せしむべく、得失相償はざるに至るは言ふ迄もなし、此の一事にして十分理解されたらんには、御身は實務處理の活動中に他を顧るが如き念慮を矯正し得らるべし。

（五）精力集注は此の如くして成る

實務家として最も避くべきことは、何事をなすにも全力を用ひずして精力の一部分を以て事を處するにあり、此の如きは將來の大成を期するの道を根底より打破するものにして、立身榮達は思ひも寄らぬことゝいふべし、獅子の兎を打つさへ猶且つ全力を注ぎて之に當

ると聞く、如何に輕微のことなりと雖も一半の力にて成され得ることは天下に於て之あるを認めず、識見の狹少なる青年が實務に當るや、『斯かる小事は、善い加減にして止め置くべし』などゝ放言して、自己の力量のあらん限りを發揮して之を處理せんとせず、ために錯誤を演出して、整理の不十分なるを表現す。

御身は從來幾多の先輩の教訓と大家の著書に因りて修養したるが如く、實務處理の神髄にして、根本たるものは、自己の全力を一事に傾注して他を顧みざるにあるを悟りしならむ、斯くするに於ては自己の思想と雙手は實務の上に向ふが故に、其解決すること極めて速かにして、且つ遺漏なきは殆んど不思議と思はるゝ程のものなり、怠惰漢が兩三日を費して猶且つ處理し得ざる上に、誤謬、遺算の多きに反し、此の如き人に於ては、一日にして悉く之を巧みに解決して、一點一畫の苟くもすべきものなきに至る、他なし是れ精力を一時に集中するの賜にして、門外漢の窺ひ得ざる所にあらずや、人苟も此の重大事項に着眼し、其効果の偉大なるを認むるに於ては、何の暇ありてか執務中に注意を他に轉ずるの愚を學ばんや。

（六）實務家果して餘裕の時なきか

實務家は常に業務の多忙なるを愁訴し、餘裕の時間なきを嘆ずるの僻あり、こは是れ彼等に於て眞實に餘裕なきにあらずして、實は餘裕を作るべき方法を案出せざるに因る、此の故に餘裕なしといはんよりは、寧ろ自ら好んで長き劇務を作るといふの優れるに如かざるを見るなり、今日の如き生存競爭の激甚なる時代に於ては、愚人狂者にあらざる限りは、無用の時間を有するものなき筈ならずや、斯く繁忙極まる時に於ても、十分に實務以外に

利用し得らるべき餘裕を求め得る所以は、要するに自ら工夫を凝らして之を作り出すにあるのみ、業務閑散なるが故に餘裕を作られ得るといふにはあらず。

然らば如何にして此の餘裕の時間を作り得べきかといふに、實務處理の時に於ては、一意全力を之に傾注して、要點、急所のみを目懸けて根本的に解決するが故に、腦力が要すること稍〻大ならんも、其時間は極めて僅少にて足れるものなれば、朝來暮去役々營々として机に向はずとも、尤も剴切なる効果を收め得るに至るや疑ふべからず。

英米人の實務處理の方法を見るに、一として玆に基かざるものなし、一小事を處するにも、若くは單に談話をなすにも、總て簡潔主義を第一に置き、時間中は一心不亂に殆んど戰線に入りたる人の如くに奮鬪し、時間の來ると同時に、規律正しく執務を終るを以て、少量の時間を以て善く最大の効果を收め得らるゝものにして、眞に敬服の外なし、英米國民が世界の大國民として雄飛するのみに止らず、商業上に於て覇權を握るに至るもの決して偶然にあらざるを知るべし。

佛國人に至りては之と反す、彼等は早朝より店舗を開き、晩くまで閉店せざるも、其長き時間の中は、活動、秩序、奮鬪、精勤に基きたる執務法を講ぜず、一言以て之を掩へば、實務家に取りて最も必要なる精力の傾注を應用せざるが故に、佛國の商業界は、世界の上より見て何等の威力を有せず、彼等が富有をなすものゝ多くは、單に消極的の節約主義を守るに基くのみ、御身は此の兩國民の執務法が既に根本的に相違せるを見れば、其結果の兩國商工業上に影響することの偶然にあらざるを疑はざるべし。

（七）精力傾注の効果や偉大

此の如く一事に對して全力を傾注することは、成程一時或は苦痛を感ずることもあらん、面倒と思はるゝこともあらん、然かも此の苦痛といひ、面倒といふものは、一時のことにして、永續すべきものにあらず、又最初に於ては、苦痛たり、困難なりしことも、時日の經過に伴ひて一種の習慣となり、却て此の中に無限の興味あるを覺え、姑息的處理の如何にも無趣味、乾燥なるに驚きて、之を厭惡するに至るべきは、言を俟たずして明かなり。

精力傾注の効果は、決して玆に止まらず、否之よりも更に特筆大書して、御身の注意を乞ひたきことは、非常に時間を省約せしめ、繁忙無比のものに對してすらも、餘裕を見出さしむるに至ること是れなり、時間の不足と業務の繁劇は、今日の實務家を通じて、苦情を唱ふるの原因なるも、予を以て見れば、其責任は主として實務家にありとす、如何に繁忙無比の衝に立つ人なりとも、全力を傾注して巧みに之を解決し、後日に遺留することなきに至らしめば、實務の輕きに過ぐるを感ずべし、從つて繁劇活動の人物をして綽々として餘裕あるを發見せしむるも怪むに足らず。

（八）時間を浪費する人天下に多し

世人の多くは、時間の節約に對して注意を缺くの甚しきは寧ろ豫想外にあり、金錢に就ては、厘毛の微といへども苟くもすることなき敏活なる實務家すら、時間の不經濟に就ては、殆んど之を雲烟過眼に附し、毫も顧慮するなきは、予をして轉た喫驚の念に打たれしめざるを得ずといへども、此の如きは眞個の實務的處理に於て敏活を盡す所以にあらず、切言すれば、事物の細末に拘泥して、大局を見るの達觀なきに歸するものなり、實務家として金錢に就て注意を拂ふは、當然のことなれど、時間の不經濟に對して無頓着なるは、

商機を見るの明なきのみならず、金錢に對しても精密の注意を拂ふの人とは言ひ難し、金錢の生ずる基は、時間にあり、時間を除いて金錢あるべきの理なきに、有形的の金錢のみに心を奪はれて、金錢の因て以て生ずる根本に着眼せざるは、無智無定見の極にあらずして何ぞや。

一圓の金錢の使用に對して等閑に附せざる人々が、一時間二時間、乃至は一日の空費を何とも思はざるは、金錢的失費よりも甚き失費なりといはざるべからず、今一力に於て百金を儲くるの力ありながら、他方に於て百時間の損失をも意に介せざるは、百時間に對する報酬を損失したるものにして、結局莫大なる金額の損失をなしたるに當る、否金錢以上の損失に當るにあらずや、そは一旦空費したる時間は、萬金を積むとも、到底之を恢復するの道なければなり。

（九）此の一小區別あるのみ

英米の實務家なりとて、別に我國人と相違せる先天的性格を備ふるにあらず、只彼等は實務を處理するときに於ては、決戰奮鬪して全力を一時に傾注するが故に、短少の時日の中に於て、十分完全に自己の着手せる事業を經營し、猶且つ餘裕を生ず、左れば繁劇無比の人といはるゝものすらも、或は社交場裏に臨んで其圓轉滑脫なる才能を發揮して夜會に一種の光彩を發し、或は夏季に於ては、山紫水明の地に逍遙し、或は黃昏を一家團欒の中に送りて、人生の快味を覺ふるものにして、如何にも羨むべき態度なり、然るに我が國の實務家は、佛國人と同じく、緊要なる實務處理の時間をば、或は不注意の中に目送し、或は無用の閑談に花を咲かしめ、直に斷然たる裁決を下し得ず、徒らに荏苒して重大事件

すら他日に繰越すに至る、之がために終日營々役々として、猶且つ餘裕の時間を見出し能はざるは言ふまでもなし、其結果は事業の大頓挫を來し成功の光明を望むこと遲々たらしむるもの誰か以て偶然なりといはんや。

御身にして以上の事理に徵して釋然として大悟し、巧妙なる實務的處理を望まば、よろしく日常注意して、實務に對する全力傾注を忘るべからず、敏活の解決、時間の經濟、才幹の訓練等の如き總て實務家として必要なる資格は、問はずして此の中に發生すべし、何事をなすに就ても此の大局に眼を注ぐあらば、其他の枝葉の問題は、問はずして、解決せらるべし、時下暑炎燃るが如し、十分自愛する所あれ。

八月十二日　父より

"Success in business is seldom owing to uncommon talents or original power, which is untractable and self-willed, but to the greatest degree of common-place capacity." ——*Hazlitt.*

第十五信　健全なる意志の修養を敎ふる書

（一）天眞爛漫の心情ある賞讃の辭

我が親愛なる秀雄よ、本日御身の友人なる山本秀武君來訪ありて、御身と永く學窓に於て螢雪の苦を共にしたるのみならず、卒業後も屢〻來往を共にして、最も親密なる間柄なりと語られしは、予の大に滿足する所なりき、同君は御身の學殖才幹に就ては、非常に崇敬の念を禁じ難しと見えて、談話中幾度となく、讃美、感嘆の語を交へられしは、必ずしも御身の父なる予に向ひて、甘言諛辭を呈して予の意に取り入らんことを求むるに汲々たるものとは認むること能はず、若し斯の如きこと〻心附きたらんには、予が平生の氣質よりして、面談を謝絶して、斷乎として屈する所なき筈なりき、然かも同君が此等の語を發するや、言々句々衷心より肺肝を衝て出づるものありしを認めたれば、是れぞ眞に同君が一片潤飾なき天眞爛漫の心情なりとして、予は衷心よりして欣喜の感を禁ずること能はざりき、凡そ人の父としては、我が子の言行が眞實の情より他人に讃美と感嘆を表せらるるに優れる滿足の情は之を他に求め難し。

（二）細雨を恐れて約束を破る

山本君は斯く御身の美點を推賞すると同時に、過日御身が、同君と相携へて御身の恩師なる藤井博士を訪問して現今の商業政策に就て大に論戰に花を咲かすべしと堅く約束し置きながら、定刻に至り、俄かに天氣模樣の一變して、降雨霏々として軒を打つに至りたる

を見るや、御身は俄かに其約束を破りて藤井博士の宅へ訪問を見合はせたき事を申込みたりし由、當時山本君は已に時日を豫め期して同博士に通知し置きたることなれば、輕少の降雨のために折角の會見を中止するは本意にあらずと信じて、單獨にて藤井博士を往訪し、論談久ふして大に益する所ありて歸りたるよし。

更に又同君の談に因れば、御身は同窓者よりして折角にも好意を以て御身の智慮の及ばざる所に就て忠告し呉れたること屢〻なりしに關はらず、其厚意を感謝することは爲さずして、『斯の如き言辭を以て予に臨むとは不都合なり』など唱へて、忽ちにして憤怒の情を洩らすのみならず、御身が任務とすべき困難の事に遇へば、百方手段を講じて其義務を免れんとするの方便を取るに汲々たりと。

（三）是れ薄志弱行の事實

予は山本君が前後の談話よりして察するに、同君は必ずしも御身が同君と行動を共にせざりしを憤りて、予に對して御身を讒訴し、殊更ら悪聲を放ちたるものとは認むることは能はず、且つ又同君の言語態度の堂々として如何にも男らしき性格を表示せられしに對しては、予と雖も畏敬の念を表せざるを得ざるものありたりき。

御身が平生に於ける態度、意志より察するに、恐らく山本君の言は悉く事實に基き、然かも御身の最も弱點とする所を捕捉するに於て之を掌に指すが如きものありと感じたりき。予は常に御身が薄志弱行の色あるを見て、是非とも之を矯正せしめんと思ひしこと再三なりしも、其都度御身は、決して御心配に及ばず、必ず誓て之を矯正して完璧の域に

入れて御目に懸けんと言はるゝが儘に絶て詰問もせず、又強て其餘を追窮するの勞を取らざりしは、今に至りて之を見れば、非常なる予の手落ちと謂はざるを得ざるものなり、予は今日に於て予の胸中の所思を捧げて御身のために腹藏なく陳述するの機會に接したるに因り少しく予をして述ぶる所あらしめよ。

（四）　孱弱の婦人も有髯漢を凌駕す

予常に思ふに、人間として最も意氣地なく、賴み甲斐なきものは薄弱なる意志を有するの徒に外ならずと、之に反し、人間として最も賴もしく且つ快活にして、愛すべきものは、元氣縱横、意志健全、百折不撓にして鐵石の如き心膽を有するものならずんばあらず、然かもこは是れ必ずしも男子に限りたるものにはあらずして、女子と雖も亦其理を同ふするを見るべし、而して斯の如き意氣と節操に因りて發奮勇躍したる婦女は、其體質に於てこそ孱弱蒲柳を免れざれども、其心膽に至りては遙かに五尺の有髯男子を凌駕すること數段なるを知らずや、而して世に處し事に當るに於て最も有力なるものは、體質の壯健頑强なると蒲柳なるとの差にあらずして、其心膽意志の强弱如何にあり、固より斯くいふとても身體の健全を無視するにあらざれども、百般動作の基たる意志の健全、堅固を外にして如何にしてか處世成功の端緒を開くことを得べき、男子にして此の健全なる意志を缺き、着實の氣象を喪失せば、其體質は堂々として赳々たる武夫を凌ぐとも、其實質に於ては、孱弱蒲柳に傾く婦女子にさへ劣るものといふべけれ。

（五）　萬綠叢中に於ける一點の紅

男子にして健全堅固の意志を缺けば軟弱なること微風にも堪へ難きものと化すべし、之に反し婦女子にして此の意氣を備ふれば、赳々たる武夫も之に對抗すること能ずして、見苦しくも其前に屈服せざるを得ざるにあらずや、御身は沙翁の戲曲を通讀せられて御承知なるべきが、彼の有名なる英國リヤ王の最少王女コルデリヤ姫の如きは、金枝玉葉の身を以て非常の逆境に臨まれしに關はらず、ケント伯の擁護の力に因りて、四圍の强敵と戰ひ、殊勝にも父上の仇讎を報ぜんとす、其勇壯絶倫の意氣に至りては誰か之に對して畏敬の念を拂はざるものあらんや、後世沙翁の『リヤ王』を評するもの皆翁が筆力の纖巧絶妙を說くと雖も、然かもコルデリヤ姫こそ萬綠叢中に一點の紅を點ずるものにして翁の悲劇に神來の力を添ふるものなれ、ア、如何なる人ありてか此の王女の意氣節操の凛烈なるに敬仰同情の念を拂はざるものあらんや、然かも沙翁の筆に斯くまで活氣を添へしめ世人をして感嘆の念を抱かしむるものは、一に忠孝兼備のコルデリヤ姫の雄健不拔の意氣を描寫するに因る、果して然らば孱弱なる女子すらも、一片稜々の意氣能く男子を凌ぐべき一端を窺ひ知るに足らずとせんや。

（六）意志强弱の分岐點此所にあり

又御身は沙翁の悲劇『ロメオとジユリエット』を讀んで知らるゝ如く、ロメオが其雄健堅實なる意氣を涵養することを知らずして、漫りに仙女の集會する舞踏の席に列し、窈窕たる春色に醉ひ、天來の妙音と疑はるゝ奏琴の聲に耳を奪はれて自ら制すること能はざりしの極は、多情なるジユリエットと握手を交換したりしも、鴛鴦の夢は長へに闌なること能はずして、墓前に於て見苦しき最後を遂ぐるに至りしものは、其心中に男兒的勇

敢なる氣象の缺如したるため孱弱無比の心情を有する貴公子として終りたるまでのみ、婦女子が孱弱蒲柳なるは固より其天性なれば、止むべからざるものとするも、男子にして此事あるは、誠に恥かしく意氣地なきこと此上もなき次第といふべし。

然しながら何故に、婦女子すらも雄壯活潑の動作を演じて世人を聳動せしむるものあるにも關はらず、男子にして一生を通じて薄弱因循にして無氣力の人たるに過ぎざるか、是れ一は其人の天分にも由ることならん、左れど先づ第一の要點は、是れ健全堅牢にして鐵石の如き心膽の修養如何に存するものと覺悟せざるべからず、是れ御身が第一に着眼すべき要項と申すべきなり。

（七）丈夫漢の心事は斯くて形成す

人苟くも其全力を傾注して其意志を修養し、精益〻精を加へ、練益〻其練を增さんには、薄弱なる意志は忽ちにして其跡を潛め、雄健着實にして赳々たる武夫にも劣るまじき大丈夫の心事を形成するに至ること決して難事にあらざるを見るべし、明の碩學王陽明が知行合一を唱へたるが如き、スマイルスが自助論を主張し、ローズベルト前大統領が奮鬪主義を說けるが如きは、曩に大要を述べたるが故に、御身の知悉する所にして予の今又反覆して絮說を試むるの要なき所なり、然かも其歸する所は、一にして健全堅固なる意志の鍛錬にあらざるなし、而して人生成敗の動機が、一に係りて人間意志の强弱如何に存するを見れば、古往今來聖者哲人碩學が爭ふて其精神修養法を說けるものは、眞に自然の勢にして固より怪むに足るものあらず。

左れば一家を興し、名を擧げ、其光榮を天下に博するも將た又名門大家をして一朝にし

て零落蕩盡せしむるも、一に是れ意志鍛練の有無、換言すれば强健なる心膽を有して之を實地に活用し得らるゝや否やに因りて定まるものなれば、精神修養の効果の偉大なるは玆に論ずるまでもなき所也。

（八）自己の決心如何に存す

若し御身にして今より精神を一變し、從來の如き薄弱の意氣にては到底大事に當るに足らずと深く自ら洞觀して、其萎靡不振の氣象を一掃して飜然として心氣を一轉せしめ、健全猛進の氣宇を搆成するの決心だにあらば、大なる犧牲を拂ふに及ばずして必ず堅固の意志を有するの人となるに至るべし、若しも御身にして予が此の注意に對し、極めて冷然として等閑に附し、依然舊套を墨守して顧みることなくんば、御身は從來の儘の薄志弱行の人物たるを脱する能はざるべし、且つ又其前途に於ては赫灼たる光明を認むるに由なく、一生を通じて碌々たる徒に終るべきのみ。

論より證據、試みに世人の爲したる形跡に徵して之を窺へば其一般を窺知するに足るべし、意志堅實にして不屈不撓の人々は、縱し眼前に幾多の辛酸危險の横はり其行路を邊塞するの觀あるも、最後に於ては能く之を打ち越えて巧みに自己の行くべき安全の道路を開き得るに至るものなり、之に反し薄志弱行の人は、其眼前に幸運の搖曳し、早く之を捉へよかしと迫らるゝにも關せず却て之を逸して豎子をして空しく盛名を博せしむるに過ぎず、豈に遺憾の至りならずや。

（九）目的を目懸けて突進すべし

其理他なし、人の意志にして十分に鍛錬せられ、健全着實の域に入れる上は、如何に其人の行動を妨害するものありと雖も、毫も之れがために其志氣を沮喪せしめず、艱難に遇へば、却て一層其猛烈なる抵抗力を起して奮戰するを以て失望の何たるを解せず、挫折することを知らず、目的と定めたる所までは、十年を要するも、二十年を要するも、飽くまで之に執着して其目的地に到着せずんは止まじと決心す、困難の大にして苦痛の益〻激しきを見るや、是れではならずと一層の奮發心を出して蹶起し、多少にても希望の光明を望むあらば、斯かる所に甘んじ、滿足しては到底終生の目的を達する事叶はず、今一奮發なくてはならずと信じて努力するが故に、眼に見ゆると見えざるに論なく、其爲す所は歩一歩づゝ進捗するに至るべし、斯の用意を氣永く持續し行く中には、最後の成功を奏して萬人をして驚嘆せしむるに至るなり、一に是れ根氣の強きに因るなり、意志の薄弱なる徒にありては、斯かる希望を心中に期待するにしても、此所まで漕ぎ附くべき元氣なきが故に、中道にして挫折せざれば、顚倒して自ら英氣を屈するに過ぎず。

（一〇）老ては駿馬も駑馬に及ばず

斯の如くなし行く中に、光陰は矢の如く驅せ去りて、薄志弱行の紅顏少年をして白髮霜を戴くの老翁たらしめ、舊時を回顧して『ア、予が前半の生涯や眞に一夢の恍乎たるものあるが如し、今に於て始めて舊時の意志の誤れるを悟りぬ、いざ是より眞面目の人間となり强健の意志を發揮して奮鬪の覺悟を定めん』とまでの決心を立つるは、晩蒔きながら殊勝の至りなり、左れど老ては駿馬も駑馬に及ばずとの喩への如く、最早體質意氣とも全然衰弱して、老齡の悲しさは如何に心は矢竹の如く勇むとも、手足の之に伴はざるを如何と

もすべくもあらず、此の如くして貴重の一生を碌々の中に經過し、晩年に至りて既往に顧み痛憤悔悟の涙を流すといへども、最早施すに術なきを見るに至るべし。

然かも秀雄よ、御身は今日斯かる人々の心事に對して篤斗注意を凝らされよ、他人に關する問題なれば、毫も予に於て關する處なしなど油斷をなして決心を緩むる勿れ、般鑑遠からず、御身にして今日より飜然として昨非を悟りて改善を加へずんば、御身も亦同一の運命に陷るべく迫らるゝにあらずや。

（一一）強健の意志に達する第一歩

然らば如何にすれば健全堅牢にして鐵石の如き意志を建造して百難に對抗して猛進すべきかとは、御身の必ず發すべき質問ならむ、予は御身が斯の如き質問あらんことは固より期待する所なれば、之に對して出來得る限り御身に滿足を與へ、疑團を氷解すべく力むるは、父としての予が義務なりと信ず、御身として強健なる意志を建造するに就て第一に力むべきは、一旦御身が是非とも完成せざるべからざる事として着手したる上は、縱令如何なる障害に遇ふとも、之がために辟易することなく、飽くまでも其志を達せずんば止まずとの決心を實現せざるべからず、是れ不動の意志修養の第一着手といふべし。

今若し御身が毎日書卷を五十頁づゝ讀むと決心したりとせんに、中途にて來客に接し、或は近郊へ散歩のために出遊すべしなど口實を作り、若しくは今日は何となく氣が進まざれば、庭園内を逍遙するの元氣こそあれ、一室に閉居して讀書三昧に日を送ること能はずなど稱して、自ら聲言し自ら約束したる所を實行することなくんば、是れ御身親ら御身の良心を欺くの行爲なり。

（一二）口實を設くるは薄志弱行の始

更に簡明に切言すれば、先づ薄志弱行の端緒を開きたるものなり、困難險厄に對抗すべき元氣の喪失せるを表示せるなり、若し又他の一例を擧げて之を說明せんに、御身が今日滯在せらるゝ修善寺溫泉の山路を橫斷して、豆州戶田港まで四里の道を徒行すべしと誓言したる以上、疾患にあらざる限りは、百難を排して旅裝を整へて出發すべきに、途中にて厭惡の念を生じたるため、若くは之を遂行する勇氣の缺如せるため、細雨の淅瀝として窓前に落下するを口實に、若くは微風起つて輕塵を捲けるを唯一の遁辭として、其實行を避け、若くは後日に延期せんとするが如きは、斷じて强健堅固の意志にあらずと信ず、若し斯かる輕微なる事故の發生したるがために、一々其決心を飜へすことあらんには、百千の事情に遭遇し其素志を貫徹して遂行を期するは何れの日にか之を望むべき、自己の決心したる所のことをば自己の最良と信じたる時に於て遂行し得ざるが如きは、明かに其人の意志軟弱にして、强敵と戰ふべき元氣なきを證明す、觀じ來れば意志修養の根底も此の試錬に耐ゆるや否やに因りて定まるといふべし。

（一三）猛然不屈の勇氣を涵養せよ

飽くまでも强忍の實力を發揮し、多少の苦辛と困難ありとも、之を色にだに示さずして最後まで之に耐へ得るものは勝ち、耐へ能はざるものは敗る、成敗の動機は一に此の點に存するを見れば、多少の苦痛と困難ありたりとて、如何でか之に辟易すべきぞや。

次には平生に於て猛然として屈撓すべからざる勇氣の涵養をなすは御身の强堅なる意志

を修養する上に於て尤も重大のことなり、世人の一事を經營する狀を見るに、之を完成するまで待ち切れず、中途にして挫屈し、『如何にも無氣力の男なるかな』との冷評を招き、自己に取りては恢復すべからざる損害を蒙るに至れる一大原因は、皆是れ勇氣の缺如に由來す、眞個健全なる勇氣の力は、其爲す所に一段の光輝と威力を帶ぶるものにして、人生の活戰場に處するに際し、此上もなき最良の武器なり、何人も心懸けの致し樣にて直ちに此武器を取て護身用ともすべく、猛進器ともなすべきに、之が利用法を講ぜずして、勢の赴くが儘に左右せしめて終局に於て大敗を招致するに至る、豈青年男子の恥辱にあらずや。

（一四）冷水浴も好個の奬勵者

要するに意志の鍛錬の第一に位すべきものは、實行力と健全なる勇氣の二者に出でざるべし、而して此の二者を皷舞せしむるに就ての手段は種々あれども、早起して冷水を全身に浴し、寒烈膚を裂くが如き時にも之を勵行して屈せざるが如き、好個此の二者奬勵の一方便たるべしと信ず、然かも是れ單に意志を健全にするのみならず、又健全無比の身體を建造するに取りて缺くべからざるの準備たるを忘るべからず、現に予が親友なる杉野博士、及び貿易會社長クリーブソン氏の如き、已に五十年來之を實踐して一日も休止したることなき由にて、兩氏とも老齢八十を出づるにも關はらず、矍鑠として壯者を凌ぐの概あるは、一に冷水浴實行の賜なりと常々之を語られたり、御身も之に倣ひ徐々に之に習熟するに於ては、左迄に苦痛を感ずることなく、然かも日常力むべき義務となりて容易に之を勵行せらるゝに至るべし。

御身若し之を實踐すべき決心あらば、今日に於て直に之に着手せられよ、時正に秋風蕭

條の候なりと雖も、冷氣未だ身に迫るといふにあらざれば、今より徐々に御身の身體をして之に馴らさしむるを要す、今若し此機を逸しなば、又明年六七月頃迄延期せざるべからず。

そは冷水浴は暑中若くは秋冷の候より着手すれば大なる苦痛を感ぜずして次第に馴致せらるべきも、若し然らずして、嚴冬の候より俄に着手することあらんには忽ちにして風邪に罹り、發熱に犯さるゝ事は、普通見受くることなり、且つ急激に腹部を冷却するの結果、腸胃を害すること尠からずとせず、此點は御身の常識に於て判斷を加へて酌量せられよ。

時未だ殘炎を感ぜざるにあらざれど、敢て凌ぎ難きにあらず、庭前の樹梢は稍〻紅色を呈し、吟蟲叢陰に唧々として愁訴し、都門の光景今正さに改まらんとす、豆陽の閑地に滯在して史上の遺跡を尋ぬる御身は、山態水容の靈活なる中に坐して予が此の長文の切々たる衷情の水泡に歸せざるやう望んで止まず。

十月十日　父より

"Every man stamps his value on himself. The price we challenge for ourselves is given us. There does not live on earth the man, be his station what it may, that despise myself compared with him. Man is made great or little by his own will." ——*Schiller.*

第十六信　讀史上の注意を説く書

（一）歴史の與ふる教訓

我が親愛なる秀雄よ、御身は在學中は勿論、卒業後も内外古今の歴史は讀過したるべければ、定めし其興味の多大なるを記憶せらるゝならん、左れど其與ふる教訓と其修養に資すべき事項に就ては十分に理解せざる所もあるべし、予は平生こそ多忙の身にて長文を草するを得ざれども、本日は臨時休業日にて多少時間の繰合せも附きたるが故に、此機を利用して一言讀史上の必要なる事項に論及すべし、固より詳細を説くには、一篇の書簡の盡くす所にあらざれども、其要領だけは指示し得らるゝことゝ信ず。

歴史は古今の風俗人情政體文學美術の變遷を記するものなれば、吾人の觀察力を養ふに就て大なる益あることは何人も知悉する所なり、學校に於て歴史の一科を課する所以も其理亦此所に存するを知らざるべからず、此のことたる御身の已に理解せらるゝ所なるべければ、予は重ねて之を告ぐるに及ばずと信ず。

然れども歴史の與ふる利益と教訓は、單にそれ丈けにあらずして頗る廣汎に亘るものあり、そは人間成功の動機と其手段を語るものなれば、今人に對して好個の鑑となるべし、思ふに、千年前二千年前の人間と今日の人間と、其天賦の資質に於て大差あるべきにあらず、只々未開時代の人は其周圍の事情よりして未開時代の感化を蒙り、文明時代の人は、周圍の文明式感化を蒙るといふまでにして、人間の本質に至つては殆んど同一たるべき也、即ち生後母乳に因て育ち、男子は二十歳女子は十七八歳にして結婚し、四十歳にして人生

尤も分別力ある時期に達し、七十歳乃至八十歳にして天命を終る、其百歳以上のものは孰れも尠しといふが如き人間の通有性は、古今の別なく殆んど同一のものなり、然らば歴史上に現はれたる人間の性行經歴は、吾々後世のものも知らず識らず同一のことを反覆することもあるべし、固より仔細に觀察すれば人の行動は悉く異れりといへども、其大局より之を見れば、殆んど其軌を同ふすと稱するも失當にあらざるを知る。

(二)　歴史は吾人の行動を導く

然らば歴史上に現はれたる人物の行動は亦是れ吾等が今後の行動の一大指針たるに足るべきにあらずや、固より其手段は異るべし、左れど其主義は殆んど同一轍に出づべし、假例へば古人の武器は甲冑弓矢なれども、今日進歩したる時代の武器は大砲小銃なるが如く、其有形的物體には相違あれど、奇策を弄し、敵兵を苦しむる精神に至つては古今其軌を一にするが如し、果して然らば歴史上の人物は、將來吾人の行動を律するに就て大なる教師となるべし、此意義よりして歴史を讀めば、史上の事實は、自己に無關係のことにあらずして、直接に大なる關係あるが如き印象を強むるに至るは、誠に面白きことならずや。

特に吾人に大なる感化を與ふるものは、民情風俗政治の變遷よりも、史上の人物の性行如何に存する也、其爲したる計畫、其人格、品性、其奸策惡德等に至るまで、一として其人物の精神的反映發射にあらざるなし、此のことたる吾人の世に處し人に接するに就て一大參考たるべし、曩にも述べたる如く、史上の英雄偉人の爲せる行動は、吾人の日常知らず識らず反覆することもあるべし、又然らざるまでも就て大に學ぶの有利なるを感ずることあるべく、亦謹んで避けざるべからざることもあらん、左れば史上の人物の行動は、悉

く吾人の處世交際の道に於て好個の照闇燈ともなるべければ、史上の人物の一擧一動に就て注意深く熟讀すべきは、予の反覆絮説するまでもなきことならむ。

御身は現に羅馬史を讀みつゝありとのことなるが、之に就て説明を試むることゝせん、御身の知らるゝ如く、羅馬の歴史には、他國の歴史よりも、有德、寛大なる人物の實例に富めるは快心の至りなり、左れば保民官とか執政官といふ如き堂々たる大官すらも、一朝事あるや、犁鋤を棄てゝ武器を執り、敵軍に對して大軍を引率せんとて蹶起したるものあり、而して其一たび凱歌を奏して歸るに及んでや再び身を耕耘に委し、殘餘の生活をば尤も謙退なる方法にて送りたるが、是れ實に光榮ある退隱と申すものなり、左れば斯かる偉人の多くは貧困の中に身を終り、公費を以て埋葬せられたること、乃木大將に髣髴たるものありたりき。

（三）羅馬英雄と其品格

例令へばキユーリアスは、厘毛の資なき人なりけるが、サムナイト人が彼に提供したる大金を斥けて、『予は自ら金錢を有するを光榮とせずして金錢を有する輩を指揮するをこそ光榮とするなれ』と豪語したり、又ファブリシアスの如きは、幾度となく羅馬軍に將たるのみならず、幾度か敵軍を破りて凱旋せし老將なるが、然かも自己の田園に自ら植ゑ自ら培養したる大根、野菜類を食ひつゝ爐邊に坐臥するを見たりといふ、其質樸愛すべきにあらずや。

スシピオに至りては、西班牙に於て勝利を得たる後、捕虜中に、程なく同國の有爲の人物と結婚すべかりし容姿絶倫なる妙齡の王室の女子あるを見たり、彼は王女を遇するに猶

是れ彼女が父の家にある時と同一の尊敬注意を受くるを得べき旨を申し渡し、王女の愛人を見出すや否や、直に王女を彼に附與し、且つ彼女の父が賠償金として持參せるものを彼女に結婚持參金の一部たらしむるを許したり、是れ實に寛大、謙遜、節制の好實例を示すものにあらずや、スシピオが西班牙の民心を收攬するに至りしもの偶然にはあらざりき。

予は近頃日本歴史の研究を愛し、史書を繙くを第一の樂みとし、暇ある毎に之を精讀し、且つ各種の講談物には多大の興味を屬するに至れり、『源平盛衰記』『平家物語』『信長記』『大閤記』『德川十五代記』『大阪夏陣冬陣』の如きは予が尤も愛讀するものにてありたり、興味の上よりも分量の大なる上より見るも太閤記は實に天下無比とも稱すべし、彼や實に佛のナポレオンと覇を爭ふべき程の大人物にして、實に日本男子中の快男子也、匹夫より起りて信長に仕へて草履取りとなり、明智光秀の信長を弑するや、光秀を誅して天下の豪傑を服從せしめたる手際は、日本開闢以來唯一人と稱すべき也。

然れども秀吉の子、秀頼に至つては事情全く異り、予は其暗愚にして諸將の賢愚さへ見るの明なきを悲しむ也、秀頼の母は淀君なり美人の聞え高けれども、要するに女子と小人は親むべからざる類のものなり、大野治長といふ卑怯千萬なれども容易秀でたる愚物を寵するに至るは不可なりとするも、大阪落城が悉く茲に由來するとは殘念の至りならずや。

（四）利慾に迷ひしものゝ末路

此のことたる『大阪冬陣夏陣』の記事を見れば明白なり、關東の兵如何に強しといへども、要害堅固の聞え高き大阪城に立籠りたる勇士をば、豈に一年内外の中に陷落し得られんや、畢竟するに君側に侍する佞臣大野父子か、自己のみ權威を弄せんとするの餘り、主

家の存亡を度外視して、忠臣義士の忠言献策を妨げ、自己の利慾のみを計らんとする不屈千萬の心懸けありたるに因るのみ、秀吉の歿後、兎にも角にも主權は秀頼にあり、而も秀頼は父の如く流離艱難の中に生長せずして、深宮の中に生長したる貴公子也、從つて秀頼の後見人たる淀君に隆々たる權勢あるは怪しむに足らず、而して淀君は大野治長を寵するが故に、其言一として聞かれざるなく、用ひられざるなきは當然のことのみ、事情已に此の如くなれば、奇謀深慮の臣其數星斗の如く數多くありといへども、其手足を縛し、其口を箝して用ふること能はざるが如き手段を講ずるに至つては、實に忠臣の切齒扼腕するに關して千萬無量の同情を寄せざるを得んや、又佞臣に對しては痛憤の感を催ほさゞるを得んや。

淀君の大野治長を寵するの一事は、確かに大阪軍をして失敗に終らしめたるの基なるは何人も異論なき所なるべし、實に豐臣家には當時勇武の士花の如く雲の如く多かりき、片桐且元、木村重成、眞田幸村、後藤基次の如きは、實に古今獨歩の名士なるに、一の大野治長のあるために、其神算奇謀も悉く斥けられ、志士皆義憤の念を催さゞるはなかりき。

德川家康は老獪なること狸の如き人也、陰險にして計り難き性行を傳へたる辯物也、愚昧なる大野の寵を頼みて權を專らにすることを熟知しければ、有らゆる手段を講じて、敵の共同一致の精神を打破せんとするを勉め、鐘銘に『國家安康、天下泰平』の文字あるを見て、是れ家康を侮辱したるものとの口實を構へ、大阪より謝罪使を送らるゝや、片桐に對しては、其不都合を嚴責し、淀君の使者たりし常光院に對しては、毫も事なきが如き風を裝ひて答へけり、思慮なき淀君の如き早くも之に迷はされたる、所謂淺慮の至りなり、況んや佞臣大野の如きもの之を煽動するに於てをや、人心を離間せしむるは家康の手段な

るに、大野淀君の使は甘々と其手段に乗せられたりとも心附かずして容易に老雄の奸計に陥る其愚劣さ加減は憐むべく笑ふべきの至りなり。

（五）名將謀士の言を容れざるの罪

又大阪城は決して斯く短日月の中に陥落すべきものにはあらざりしも、是れ愚昧便佞なる例の大野が、關東の間諜者たる小幡勘兵衛の言に聞いて、孔明の再生かと思はれたる眞田幸村の賢明なる獻策を却けたるに因るものなり、眞田、木村の如き深謀遠慮の勇士は、先づ城外に一戰して關東勢を挫かんとするの策を獻じ、始めより籠城するは此の上もなき不利と認めぬ、彼れ大野の一派は自ら間者小幡等の言に動き、飽くまで眞田等の軍議を排斥し、始めよりして大阪籠城と取定めたる如きは、實に眞田等一派の忠義を籠めたる諫言を用ひざりしに因る、暗愚なる秀頼は、丁年に達しても事理を鑑別するの明なきが第一の原因には相違なきも、それにしても、淀君、大野の如きもの君側に侍して、群良の奇計を遮ることなからしめば、天下は德川のものなりしや將た又豐臣のものなりしやは容易に決定し難かりき、左れば大野等便佞のものありて種々離間の策を講じたるは、結局關東の利とする所にして、老狸の如き家康たるもの安んぞ之に乗ぜざらむや。

又木村重成が少數の兵を率ひて今福に於て關東軍を打ち破りしが如き實に史上の奇觀にして天下無比とも稱すべし、關東大阪の一時和議を結ぶや、木村重成使者として證書の交換のために家康の陣に就て家康に對面する時の如き、何んぞ其意氣の堂々として日本男子の眞面目を發揮するや。

木村重成の使者として家康の陣に赴くや、家康は傲然として使者に對する相當の道を以

てせず、時に本多正純奥より帛紗に包みし御神文を携へ、重成に渡す、重成慎んで奉戴して其のまゝ之を正純に歸へす、曰く、『此の神文は予之を請取り難し、其理他なし主君秀頼の予を玆に遣はしたるは家康公の御判元を見屆け來れとの命に出づ、然らば家康公親しく御血判するを見屆けざる限り歸つて主君に見ゆるに由なし』と告ぐ、家康止むを得ずして現はれ、木村を睥睨して、『汝小悴の分を以て推參の至りなり』と叱責したれども、木村少しも驚かず、泰然自若として應對一點の亂るゝ所なかりき。

（六）大膽なる重成の決心

『上意にはあれど、後代まで證據として殘るべき神文なれば、御血判拜見致さずして歸らんか、主人に申し上げやうも之なければ、如何に御立腹遊ばさるとも強て御斷り申し上げ、御判元拜見の上にて拜受せん』と忌憚なく述べ立てたり、家康止むなく之を諾す、斯くて漸く滿足したる彼は、本多に向ひ、『上々樣方、斯く御和談の整ひしは、自分までも恐悦と存ずる所なり』と、家康此體を見て、『重成、何歳になるや』と問ふ、『二十二歳となれり』家康曰く『去る二十七日今福の戰ひに諸人の目を驚かし、其働き前代未聞なり、後世恐るべし、汝の父常陸介師重は石田治部のために毒殺されたり、思へば憫然の至りなり、然かも其讐敵石田は關ヶ原に於て此の家康が滅じたり、思へば昔しこそ懐かしけれ』と語る、重成答へて『殘念に存ずる也』と答禮し、且つ語を次ぎて『主人秀頼侍ち兼ねて居るならん是れにて御暇せん』と靜かに御前を立ち次室へ出づる態度、骨格、風采とも、實に無雙の勇士たり、重成列席の人に告げて曰く、『先刻は諸氏に對して失禮致せり、これ上々樣御和談も纏はざる故なり、只今斯く御判元を拜見すれば最早や敵味方の別なし、左れど方今の

世の中のことなれば此の末如何に形勢變化せざるものにもあらず、其時は重成弱年ながら秀頼公の御爲めには先途に馬を跳らせて第一番に打死致さん、但し重成は左の襟元に大なる痣あり、此れを目當になし賜へ』と言ひ放ち襟元を寛ろげて人々に示したり、當時並居たる淺野、藤堂、蜂須賀等『我一人の娘あり、天晴れ斯やうなものを聟につかまつりたし聟にならねば嫁にやりたし』等私語せしが、獨眼龍伊達政宗は感激の餘り、

梅が香を櫻の花にもたせつゝ柳の枝に咲かせてぞ見ん

の一首を卽吟したりしとか聞きぬ。

然るに大阪夏の陣にて重成の奮戰して見事に討死し、其首級を家康に示さるゝや、流石は家康なり、此首に向つて『汝重成、去年和談の使者として辯舌を揮ひ、其辭今尙耳に殘れり、汝が忠節も秀頼の神文を破りしため定めて殘念なるべし、花も實もある重成かな、其靈を崇むべき若者にこそあれ』と言ひつゝ其首を兜と共に太閤の廟所に納めしめたりといへり。

（七）櫻花の春風に散ずるの概あり

重成の大膽不敵の襟度、其戰死の勇ましさ、實に日本武士の典型として貴ばるゝのみならず、猶是れ櫻花の春風に散ずるが如く、敵も味方も惜まぬものとてなかりしは實に壯絶痛絶の光景にして天下無雙と稱するも決して失當にあらず。

其他眞田幸村の如きは、古今獨歩の名將にして、始めに大野治長一派が大阪城の堅固を恃みとして籠城せんと主張するを駁し、先づ一戰して關東軍を破らんとの策を献ぜしも、大野輩のために妨げられて其志を行ふこと能はざりしは、已に述べたる如し、左れど流

石は天下の名將なり、塙團右衛門、後藤基次、木村重成の名將相繼いで戰死し、大阪方の形勢危殆に瀕せるの時に當り、殘餘の兵を率ひて茶臼山に陣し、大に關東軍を破りしが如きは、實に眞田にあらざれば出來ぬ藝にして、德川家康が平生彼を恐れ、其高野山に退隱する當時に於てすら、間諜を放ちて、其動靜に注意せしもの固より當然なりとす。

抑〻幸村が天稟英敏にして思慮深き武士なるは何人も疑はざる所なるべし、大阪方より屢〻密使を遣はして眞田を誘致す、幸田父子心は矢竹に逸れども、德川方より命ぜられたる農民の監督嚴にして如何ともするに由なし、因て一日亡父の法要を營むにつき、高野の僧侶を招き、農民を會し、酒食を饗し、其亂醉の餘り昏睡して前後を忘れたるに乘じ、豫て諜し合はせたる一族のものと馬に一鞭を當てゝ籠を出でたる烏の如くに、大阪に向けて出發したる光景の如き、流石に智者にあらざれば能はざる才幹を示すは、豈に快心の至りならずや。

若し夫れ大野の便佞にして怯懦なる、寵を恃みて忠臣を遠け、嘉計善謀も悉く之を斥けて、自己の愚計を行はしめ、數々大阪軍の敗北を招致し、且つ又勇士をして悉く陣歿するの止むなきに至らしめたるの罪は、憎むべく憐れむべく唾棄すべき也、殊に君臣悉く難に殉し、大阪城の陷落の時に至るも切腹することすら能はずして、敵軍に捕はれて死罪に遇ふが如き、實に恥を知らぬ狂漢といふの外なし。

（八）史上の人物の活動せるを覺ゆ

其他秀賴の性行、淀君の日常の行動の如き、常に史を讀むものをして憤慨せしめざるなしと申すも尤千萬の次第にして、後世の吾人に對しても誠に啓發せしむべき大教訓を垂

るゝものなり、單に歴史をば過去の事件人物を知るの資料に供するといふのみにて讀むは、未だ以て大なる價値あるを見るに足らず、左れど史上の英雄忠臣佞臣奸臣等のなせる行爲が、吾人の將來に於ける行動に就て一大龜鑑とするに足るものありとせば、歴史上の人物は、過去の人として墳墓の中に眠れるものにあらずして、吾人の行動に就て多言多辯よく成敗の存する所を敎ふるものにして、悉く活動するを想見せしむる也、斯かる見地より歴史を讀むは、所謂活眼を開て活書を讀むものと稱すべく、實に有用缺くべからざるものたるは何人も否定すること能はざるべし、僅かに羅馬史の一部、大阪冬夏兩役史の一部に就てすら、已に斯の如き多大の興味と感化を蒙る位なれば、日本全史乃至は外國全般の歴史に就て熟讀するあらば、更に大なる感化と敎訓を發見すべきや多言を用ひずして明か也、是れ御身の着眼すべきことにあらずや。

二月十二日　父より

"Not to know what has been transacted in former times is to continue always a child. If no use is made of the labour of past ages, the world must remain always in the infancy of knowledge." ——*Cicero.*

第十六信　讀史上の注意を説く書

第十七信　勇氣の涵養法を敎ふる書

（一）軟弱に失せる動作といふべし

我が親愛なる秀雄よ、御身の近頃の動作は敢て卑屈なりとは申さゞれども、何となく軟弱にして青年時代に特有なる英氣の缺乏せるが如きを認むるは遺憾なり、是れ一つには平生御身の身體が十分に強健ならぬよりして、其精神が何處ともなく優柔不斷的となりて、それが端なく起居動作に現はるゝに因るならむ、我が家は武門の家なれば其子孫たるものは飽くまで武士の體面を辱しめぬやう心懸けあるべき筈なるは、御身の承知する所なり、御身の從妹雪子、春子は何れも動作活潑にして如何にも武士の娘らしくあるに、獨り御身のみが斯く優柔なる心事の行動あるは御身のために執らざるもの也、固より是れは天性に因ることなれば如何とも致し難きやうにはあれども、平生の修練一つにて、如何樣にも矯正せらるゝものと思はる、殊に今後實業界に立ちて驚天動地の働きをなさんとの意氣を有する御身にして、斯くまで態度行動の活氣を缺くやうにては、將來のことも案じらるゝは無理もなき次第ならずや。

要するに是れ御身が身體强健ならざるがために、動作或は言語に現はるゝに至るものにして、一日も早く之を匡正せられんことを望む、而して身體の强健は一に攝養を守るにあるべく、攝養の道は醫師の管轄區域にはあれど、要するに身體精神とも斷然たる勇氣を驅つて事に當らざるにありと信ず、若し斷乎たる決心にて規律正しく活潑なる運動をなすあらば身體は自然に疲勞し、食慾も增進すべく、夜間も安眠を得らるべし、之と同時に、

一定不動の決心にて事を處し人と接するに於ては、自然に起居動作に活潑の光景を呈すべく、他人に接しても快感を與ふべし、是れ眞に觀易き理ならずや。

斯かる事理明白にして然かも容易なる事を放棄して、決行せざる所以のものは何故なるかと申せば、一に是れ御身が勇氣を缺くに因れるものと論斷するに憚らず、一たび決然として勇氣を鼓して進まんか、予が上掲指示したるが如き御身の弱點は直に矯正せられ、別人たるの觀を呈するに至るべきを信ずる也。

（二）是れ亦修養の工夫に俟つ

如何にも勇氣は此の如く必要なるが、如何にして之を養ひ得べきかといふに至つては、卽答に苦しむなり、固より天性剛勇の人は、敢て習はずとも自然に勇氣現はるべきも、然らざる限りは容易に之を現はすこと能はざるべし、左れど是れ亦修養の工夫一つにて如何樣にもなるものと信ず。

然かしながら勇氣の本質を穿き違へて、只々亂暴を働くことを目的とするに至りては、大なる誤解といふべし、世人往々にして勇氣を斯かる亂暴と混同するの傾向あるは遺憾の至りならずや、聖人の敎へにも『暴虎憑河死して悔なき者は吾れ與みせざる也、必ずや事に臨んで懼れ、謀を好んで成さん者也』といひ　蠻勇の眞勇と相違せるを戒めたるに徵するも、勇氣は必要なれども偏すれば暴に終ることも亦忘るべからず。

然らば眞の勇氣とは如何なるものをいふかと御身の質問あらん、曰く、自己が信じて是なりとし、正しと思ふことに就ては、其結果の如何を顧みず猛然として決行するの謂ひにして、之がために往々蠻勇と誤らるゝも二者の間に大なる區別の存するは明かなり。

左れば自らの力の及ばざる場合、即ち他人より攻撃せられたる時の如きは、全然自己を忘れ力を極めて之に反抗するが如き確かに勇の範圍なるべし、然れども己の腕力に誇りて故なく他人を毆打し、若くは喧嘩を仕掛けるが如きは前にも示したる如く眞の勇氣にあらずして、蠻勇若くは匹夫の勇たるものにして、賤むべき行動たるを表す、孟子曰く『吾れ嘗て大勇を夫子に聞けり、自ら反みて縮からずんば、褐寛博といへども吾惴れざらむや、自ら反みて縮くんば、千萬人と雖も吾れ往かん……』と、苟も勇を養はんものは其心事に於て公明正大なること此の如くあらんことは予の尤も望む所たる也。

徒らに劍を按じて彼何んぞ我に當るに足らんやなど、豪語するは匹夫の勇にして、斯かる輩は鬪へば敗れて辱を招かざるもの尠し、眞勇は正義、忠實、感奮、克己に基くを以て、其動機に於ても道德的に高尚なる所ありといへども、匹夫の勇に至りては卑劣、下賤の代名詞たるものにして、士君子の恥づる所なり。

(三)　蠻勇にあらずして沈勇を要す

申すまでもなく、予が御身に求むる所は、蠻勇にあらずして沈毅に基ける眞勇なり、而して此の勇氣は生れながらにして備ふるものあり、又修養に因りて備へたるものもあり、宮本武藏、木村重成、後藤又兵衞の如き、是れ實に天性の勇氣ありし人也、北條時宗の如きは修養に因つて得たる勇氣なり、天性已に勇氣を有するものに對しては、勇氣の修養をなすを要せず、昔し英の海軍大將ネルソンは其小童の時、小鳥の巢を取りに行きて、歸宅の時刻遲れ、黃昏に至るも歸らず、其母憂ひて到る所を尋ねて、漸くにして之に遇ひたりき、歸宅後母親は『坊は黃昏頃單獨にて歸りては怒怖を感ぜざりしや』と、ネルソン曰く、『母

上、恐怖とは何のことでありますか』と、此の如きは確かに天性の勇氣に滿てるものにして、トラファルガルの大海戰の前兆は、此の母子の問答の中に現はるゝといふべし、然れども、是れ非凡なる人物に就てのことなり、御身の如きは到底斯かる人に做ふこと能はざれば、先づ修養の工夫を積みて勇氣を鼓舞するが目下の急務なるべし。

予は其涵養法に肉體的と精神的の二方面あるを信ず、肉體的とは外形より勇氣を鼓舞する方法を取るものにして、擊劍若くは柔道の如く古の武士が身心を鍛錬したるが如き方法に因るをいふ也、現今各學校にては體操科を設けて體育を奬勵するは眞に喜ぶべき現象なりといへども、未だ古の武士の擊劍柔術に因て身體を鍛へ、若くは武者修行にて諸國を歷遊したるが如き壯擧に比する能はざるは、如何にも殘念の至りなり、畢竟するに今日の青年が智育に急にして體育に專らなるを得ざるにも因るべけれど、一般青年の氣風の漸く優柔不斷に向ひたるを證すべく、必ずしも御身のみに限りたるにはあらず。

斯かる場合なれば、以上の如き方法に因て强壯剛健の身體を訓練するは、是れ勇氣を涵養するの基たるを忘るべからず、肉體の强壯と勇氣とは密接の關係あり、身體强健ならざれば勇氣も自然に現はれざるの理にて、現に御身の如きは確に其實例を示すものなれば、篤斗注意ありたきこと也。

(四) 冷靜的觀念と勇氣の養成

次には禪家の所謂修養法に則りて、氣海丹田に力を入れて、頭腦に上血せしめざるやうにと力むるにあり、是れ座禪をなすものゝ容易に解する所なり、然れども、是れ必ずしも座禪を學ばざれば不可なりと申すにはあらず、岡田式靜坐法を應用するも亦可なり、特に

靜坐法は早起を奬勵するものなるが故に、晩起の癖を退治すると同時に、勇氣を養ふに就ても實に有力の活法たるべし。

古來の武士の性格に徵するに其動作は敏活にして其態度は尤も沈着なりしは、一に是れ心を氣海丹田に用ひ、下腹部に力を入れて修業すること其素因をなすものと思はれたり、御身に取りては擊劍柔術は果して永續の出來るや否やに就て疑なき能はざれども、座禪法乃至靜坐法の如きは、小童婦人さへも日々實行するものある位なれば、御身に於ても容易に實習され得べく、且つ効果も顯著なるべけれは、斷然意を決して錬習を積まれんことを望む、是れ御身の一生に亘る重大の事項たるべし。

冷水浴及び冷水摩擦のことは、前便已に述べたる所なれば其方法の如き御身の熟知せらるゝ所ならむ、左れど冷水浴乃至冷水摩擦が勇氣を鼓舞すべき有効の方法たるに至つては實に意外とする所にして、予の實驗上幾度か之を悟れり、暑中に於ける冷水浴の如きは、尋常一樣のことにて別に勇氣を養ふことにも當らざれど、嚴冬の積雪肌を裂くの候早起して毎日冷水浴をなし若くは冷水摩擦をなすが如きは、頗る決心固く勇氣の强きものならでは出來ざる仕事なり、況んや一たび冷水に浴すれば身體裂くるが如き感を生じ、毛髮慄然たるを覺ふるの時に、遲滯なく之を實行して缺くことなきものは勇氣の充滿するものにあらざれば能はざる行爲にして、確かに勇斷果決を要す、御身は平生三伏の暑炎中は、喜んで冷水浴を斷行し之を誇示するの色あるは可なれども、十月乃至十一月頃よりは、事に托して之を廢せんとし現に廢止しつゝありと聞く、是れ御身の勇氣を養ふ所以にあらざれば、向後は如何なる日にても、(病患の時の外)日々缺くことなきやうありたきもの也。

（五）勇氣涵養の書を讀むべし

以上は肉體的に勇氣を養ふ工夫を述べたるものなれども、其精神的方法に至りては、他に道なきにあらず、そは勇氣を充實せしむる種類の書を讀むことにして、之を分ちて二となす、第一は武勇傳、英雄傳の如き書籍を讀むにあり、武勇傳に關する書は我國には極めて多し、武士道を以て久しく國民を率ひたる我日本には此類の書多きも怪しむに足らず、宮本武藏傳、犬丸五郎作傳、荒木又右衞門傳其他の如き劍客傳俠客傳はいふも更なり、舊き處に遡れば、『源平盛衰記』、『平家物語』を始めとし、『信長記』、『太閤記』、『德川十五代記』の如き何れも適當のものにあらざるはなし、是れは日本に於ける武勇傳を擧げたるなり。英文にては軍人の傳記は何れも武勇傳たるの資格を備ふ、然れども一々其書名を擧ぐるは煩はしければ、先づ『プルータック英雄傳』を擧ぐれば足るべし、此書は隨分舊き書なれども讀んで興味多き記事多く、古今の名將も之がために感奮したるもの多々ありしとのことなれば、有益のものなるは疑を容れず。

更に他の種の書籍は、勇氣を哲學的に說明したるものにして、理論上より勇氣の眞相を悟りて之を實行すべく求むるにあり、此種の書は頗る多し、第一は聖書の如き、佛典の如き、論語の如き、孟子の如きものにして、特に佛教書中にても禪學の說く所は、死生觀を明かにするを以て、古の武士が死を懼れざりし精神を佛教特に禪學に求めたるに徵しても、如何に沈着冷靜勇氣の念を養ひ得るかを察するに足るべし、其他王陽明の著書、洪自誠の菜根譚の如き、何れも冷靜沈着のことを說けるが故に、一種の哲理的勇氣鍛錬法とも見るべし。

希臘にストイック哲學といふものあり、浮世の事物に心を動かさず、物外に超然として冷然無頓着に構ふることを敎ふる點は頗る禪學に類す、此種の敎訓は直接に勇氣を鼓舞するものにあらざれども、非常の場合にも泰然自若たるべき心事を說くが故に、是れ亦勇氣を涵養するに就ては、間接に多大の効果を奏すべきは論を俟たず、精神的修養法としては重大なる地位を占むべし。

（六）實行の伴はざるは空言のみ

勇氣涵養の法は大體右にて盡きたり、左れど單に右の方法を學べば、夫れにて滿足するは心得違ひなるべし、先づ其學びたる所を實行することが第一の急務ならずや、然らずんば机上の空論に終るべき也、換言すれば自己が果して勇氣を涵養されたるや否を自ら試驗するを要す、試嘗の法は、或は正當のことなれども他人の言ひ憚る所を言ふとか、公開席上にて忌憚なく自己の所見を吐露するといふが如き、或は深夜山路を旅行するが如き、或は早起して冷水浴を試むるが如き、悉く是れ勇氣を試むべき方法たるを失はず、それも一度や二度にては十分ならず、屢〻反覆するに至れば、怯懦の心は去つて、思ふ存分のことをなし得らるべし。

茲に注意すべきは、勇氣が如何なる場合にても、動機の正當を離れざるにあり、其目的とする所に於て何等疚しきこと之なきにあり、是れ尤も大切なることゝす、英語にては、同じく勇氣にても、道德的のことは Courage と稱し、腕力的のことは Bold といふ、二者の間に截然たる區劃の存するを見るべし。

動機の正當といふ一事は、勇氣を生ずるに就て重大なる着眼點なり、例へば、他人が强

盗に襲はれんとするを見て、こは怪しからぬことなりと義憤の念より、其賊に一撃を加へて被難者を救はんとするは尤も美はしき行爲にして勇氣の煥發したるに相違なけれど、之と反對に自己が不法行爲をなして他人より打撃を蒙りたるに際し、之に憤慨して之を相手と格闘せんとするが如きは、所謂匹夫の勇氣にして眞勇にあらざるなり、眞勇にあらざることは是れ教育あり智識あるものゝ謹んで避くべき所にして、斯かることは、男子として尤も賤むべきことなれば、呉々も注意せられたし。

青年血氣の勇を喜ぶ時代にありては、兎角に動機の正否を辨へずして、一たび自己が決心したる上は、是が非でも遂行せんとするの傾きあり、是れ後日に悔を遺すの基にして恐るべく忌むべきの至りといはざるべからず、他人より怨恨を買ふの基は、匹夫の勇を推し通さんとするに出づること世上屢〻見受くることにあらずや。

（七）動機の正邪を鑑別せよ

左れば其動機の正非を見別けて勇氣を應用するが君士人のなすべき道なるは以上の叙説に因つて判明したるならむ、然らば勇氣は此以外の場合に用ふべからざるものなれども、感情の激するに伴ひ、或は其他の事情よりして、用ふべからざることに其勇氣を濫用して他日に於ける禍根を遺すが如きは、匹夫の勇を示せるものなり、若し眞に思慮ある人ならんには、正當なる目的を離れて勇氣を表示すべき筈なきに、血氣の勇に驅らるゝ悲しさは、往々其目的を誤るは、皆是れ思慮の足らざるに坐するのみ、孔子も、『小人元と罪なし、玉を抱て罰あり』と言へり、勇氣の場合に就て見るも亦其趣を一にするにあらずや、勇氣は士君子の尤も貴ぶ所にして、日本男子の本色は茲にありといはるゝ位なるも、匹夫の勇

に至りては小人愚者の好んで學ぶ所にして、いよ〳〵以て其人物の下賤陋劣なるを察するに足るべし、殊更ら小人愚者の行爲に倣はんために、匹夫の勇を養ふものとてなかるべきも、一たび勇氣にして其動機の正當を失すれば化して斯かる形體を帶ぶるに至るのみ。

若しも勇氣を狹く腕力的方面にのみ應用するものと解釋すれば、今日の如き文明社會には之が活用を見ること尠きに至らん、然れども廣く之を精神的に解釋すれば、吾人の世に處するや、一として勇氣の必要を認めざるなし、大膽に所信を公言するの勇氣、事業界に立ちて難局に處するの勇氣、不運に陷りたる場合にも心を沮喪せざる勇氣、飽くまで不撓の精神を抱いて奮鬪努力するの勇氣、先輩の前に臨んでも自己の所信を公言するの勇氣等數へ來れば、殆んど際限なきことなれど、皆是れ勇氣を用ひずして可なることなし、若し勇氣を以て臨まざるべからざる場合に臆して現はさず、或は逃遁せんとすることあらば、折角に成らんとすることも成らず、歡迎せらるべきことも嘲笑を蒙るに終り、名譽のことも恥辱と化し、此上もなく面目を失するに至らむ、此種の類例を史上に求めんか殆んど無數に達すべし、勇氣の有無は此の如き關係を有することなれば、御身たるもの宜しく予の指示したる活法に基き、根本に遡りて鋭意よく沈勇を涵養せんことを切望するもの也。

四月十五日　父より

"Courage is like the diamond,——very brilliant, not changed by fire, capable of high polish, but except for the purpose of cutting hard bodies, useless."

——*Colton.*

第十八信　讀書の眞諦を教ふる書

（一）何故腦中に智識存せざるか

我が親愛なる秀雄よ、御身は是れまで學校にて可成り讀書せしが、又課程外にても參考書其他を讀みたること多き故、今日の青年中にては、決して讀書の分量の不足したるものとは見做さず、左りながら、御身は斯の如き修養を積みながら腦中に殘る所のものは極めて輕少にして、淺學なる予よりも貧弱なりといふに至つては實に遺憾の次第ならずや、讀書修養をせざるがために、智識の不足せるといふは世間に見受くることなれど、相當に勉强しながら御身の如く、腦中纏りたる智識の存在せざるは、自己に顧み少しも恥ぢとも思はざるか。

察するに是れ御身の勉强の力が不足せるに因ると申すにはあらずして全く御身が讀書法の宜きを得ざるが爲めなるべし、日本には讀書法といふが如きもの之なけれども（尤も近年に至りて稍〻現出したるは喜ぶべし）外國には此の類の書頗る多く、且つ讀書生が之に注意するは到底日本に於けるの比にあらざるを見るなり。

讀書法とは何ぞやと申すに、書を讀むに就て有力有効の方法を指すに外ならず、讀書をせんがために更に其方法を記したる書を讀むが如きは隨分馬鹿氣たる次第と冷評するものもあらむ、左れど是れ事理に暗き輩の口にする所にして取るに足らず、予は先づ簡單に其必要なる所以を述べん。

元來讀書は道樂のためにするかといふに、小說戲曲の如き娛樂半分に讀むものは固より

道樂半分に讀むものなるゆゑ、如何樣に讀みたるとて差支なけれど、智識を注入せんがために讀書するに就ては然かく無造作には行かず、吾人の智識は或は敎師の說明、演說、談話等幾多の方面より注入せらるゝものなれば、讀書が唯一の智識を得るの要素にあらざれども、讀書も亦有力なる智識注入の一方法たるは何人も拒否すること能はざるべし、そは人間社會に於ける凡百の思想は、之を文書の上に寫し得ざるものなしといふべき次第なれば、書籍の如くに智識と有力の關係を有するものはなかるべし、實をいへば智識は人の思想なれば頭腦の中に存すべきものなれど、其思想を外部に現はし永遠に傳ふるため書籍を通じて文字の力に賴りたるのみ。

（二）巧妙に讀書するが斯法の目的

果して然らば、書籍を讀むに就て其巧拙の存するは明白ならずや、讀書法は、巧妙に書を讀む道を敎ふるものにして、讀書修養に心を用ふる御身にして從來未だ玆に着眼せざりしといふは迂濶の沙汰といはざるべからず、左れど、今更ら玆に御身の不注意を攻むるが予の本旨にあらず、予の目的とするは、御身をして讀書法の一般に通曉せしめ、讀書の効果を全からしむるにあり。

古人も讀書の德を贊したること頗る大なり、王荊公曰く、『貧者は書に因つて富み、富者は書に因て貴し、愚者は書に因て賢く、賢者は書に因て利あり』といひ、柳屯田が『學べば則ち庶人の子も公卿となる、學はざれば則ち公卿の子も庶人となる』といひ、韓退之は、『賢愚同一の二少年も學ぶと學ばざるに因て一は龍となり、一は豬となり、一は公相となり、一は馬前の卒となる』といへるが如き、讀書と智識の關係は水の魚に於けるが如くに

描き出されたるを見るべし、今日の文明社會に於て讀書の効用を知らざるものはあらざれど、よく讀書法を解して讀書すること尠きがために効果を收め得ざるのみ。

往時は今日と違ひ、書籍の數も尠く、且つ之を求るにも容易ならざりしかば、手當り次第に讀むにしても何程も手に入ること能はざる有樣にてありき、今日は昔と違ひ、活版印刷の術開けたるがため、書籍刊行盛大に至り、日々刊行する書籍の數にても夥しきに達せる外に、外國にて出版されたるもの頗る多きに上れり、內國の書籍のみにても容易に讀み盡されざるに加へて外國語にての著書も參考せざるべからざる次第なれば、讀むべきの書は多きに過ぎて如何ともいたし難し、是に於て斯かる多數の書卷中より最良のものを撰定せざるべからず、事情已に斯の如くなれば、手に入りたるものを悉く讀まざるべからざる義務もなければ、又何人も到底斯かる時間とてはあらざるべし、左れば撰定の上に撰定を加へて、是非必要の書のみを讀むやうにすべし、最良の書とか必要の書といふことは、自己の專門の職業如何に因つて相違あるものなり、從て均しく最良有益の書なりとするも、甲乙丙丁の人各專門的職業を異にせば、最良最要の程度も各〻相違あるは勿論なり。

(三) 專門書は專門家に質すべし

先づ專門に關する著書は、專門學者に批評を乞へば大抵之を決せらるべきが故に、其の上にて最良と認めたるものを、購讀すれば可なり、一般的書籍に就ては、撰擇の標準なかるべきも、新聞雜誌の評判善きものゝ如き頗る注目に値ひすべし、尤も此等は娛樂的にはあらざるも、專門書にあらざる限り、自身の分別にて撰擇せらるべし、卽ち著者の名聲と學殖、書店の信用、題名の如何若くは目錄の一般等にて大要を判斷されざるにあらざるべし。

然れども斯く撰取し來りたる最良の書も、之を讀破すること容易の業にあらず、專ら力を學問に濺ぐべき學生の身にても、讀むべきの教科書と參考書ありて、平生之に忙殺され居るべし、況んや日常業務の多忙なるものにありては、到底一册の書すら讀むこと能はざるべけん、然らば定業あるものは讀書すること能はずといふ結論を下さるべし、從つて讀書生は無用閑暇の富有子弟に限らるゝに至つては、國民全般を擧げて智識に盲目たらしむるものにあらずや。

天下此の如き理あるべからず、少年青年時代は一生の中にて尤も讀書修養すべきの時なれども、其方法宜きに協はざれば、讀みたるもの少しも消化されずして丸呑みとなるべし、更に時間の上よりすれば、『多忙々々』の口實の下に、容易に讀書の時を求め難きに至らむ、世人較ゝもすれば則ち曰く、『何れ他日閑暇を得たる時には讀書せん』と、御身は果して斯かる人の言に倣ふや否やは知らざれども、天下に是れほど馬鹿氣たる思想はなかるべし、古人が『暇あるを待つて書を讀めば必ず讀書の時なし』といひ、又古歌に、『折々に遊ぶいとまはある人の、いとまなしとて文よまぬかな』と咏ぜるは、何人も異議なき所なるべし、先づ多忙の中をも何とか繰合はして時間を作り、斯くして漸く讀書し得るに至るべし、その決心の定まらざるものは讀書するに堪へざるの人のみ、御身は目下實業界に入るべく準備中なれば學生時代と違ひ、讀書の時間に乏しかるべきは予の萬々知悉する所なりといへども、右の如き決心にて着手せられなば一日に二三時間の繰合はせは容易になし得られん。

（四）讀書時間の操り合はせ

先づ時間のことより說かんに、右に申したる如く、今日の如き生存競爭に餘念なき時代

に於ては、何人も寸暇とてあるべきにあらざれば、總ての人を通じて多忙なりと見做すを普通とす、左れど多忙のために如何にも致し難しといふに至らば一册の書は愚か一頁すらも讀むこと能はざるべし、斯かる人に遇つては書籍も降參なりといはざるべからず、現に多忙なる御身の如きものに對し時間を作る工夫を敎ふるは予の尤も愉快とする所なり、左れど毎日多く讀書の時間を作るに及ばず、僅に毎日二時間も規則正しく實行すれば、それにて非常なる効果を奏すべし、一日に二時間とすれば一ヶ月には六十時間なり一ヶ年には七百二十時間なり、これだけの時間に學び得たる智識を忘るゝことなくして活用したらんには、賢者ならぬものも賢者となり、智者ならぬものも智者となり、一日は一日より其頭腦は進歩するに至るべし、人間の智識を啓發して生存競爭に堪ふる實力を養成するもの讀書以外に有力なる方法あらず、左れど、此の讀書の時間を作るといふことが重大なる研究事項たりとす。

多忙の人が多忙なれば如何ともすべからずといへば、それまでなれど、それにては如何とも都合の出來ぬ次第にあらずや、必ずしも御身に限りたることにあらざれど、多忙の人が時間を作るの道は、一定の時間に讀書するの工夫を立つるにあり、特別に急務ある場合の外、夜間の一時間乃至二時間を何とか繰合はして作るにあり、假令へば毎夜十時に就眠する人が十一時まで起床すれば一時間の讀書時間を作られ得るものなり、且つ又夜間は日中よりも靜肅なれば讀書するには尤も都合よろし、若し又夜間に其時間なきを見ば早朝起床後に其時間を作ることを要す、普通世人が起床する時間を午前七時なりとせば五時乃至六時に起床すれば一時乃至一時間半の時間を作り難きにあらず、左れど早朝の時間は直に働くべき用事を眼前に控へ居るが故に心靜かなる能はず、從つて讀書に便なりとはいひ難

し、使用人の如き賤しき地位にあるものにても家人の就眠したる後に讀書するが如き篤志家の世上に之あるを見るに徴しても、業務の多忙なる人は夜間の方が却て讀書に都合よきことゝ知るべし。

（五）讀書の時間を習慣とせよ

且つ讀書の時間は成るべく一種の習慣とするやうにありたきもの也、毎夕十時に至れば必ず讀書を要求し、之を終へざれば眠り難しといふが如き習慣を作るは尤も必要のことなり、勿論身體疲勞の時の如き讀書するも會心の域に達せざるべきも、忍んで之に抵抗せば記憶し難きにもあらず、兎に角一定の時に一定の分量たけ讀書するの工夫は美はしく賢明なる習慣たるべし。

要するに是れは御身の決心一つなり、『兒は毎日業務に忙はしければ他を顧みるの暇もなし』といへば立派に予の忠告を非認すべき口實は作られ得べし、然かも夫れにては御身の智識は少しも進歩せざるべく、人物を磨くことも到底叶はざるべきことゝ思考せられよ、口實を作るは易し、自ら信じたる所を實行するは難し、御身の將來に於ける成敗の分るゝ所は極めて輕微の所にあり。

斯く少しづゝ時間を繰合せて讀書勉強すればこそ心眼開け、事理を解する力も亦漸く強烈となるに至らん。

次に讀書の方法に就ても種々ある也、漫讀すべきもの、熟讀すべきもの、反覆精讀すべきもの、横臥しながら讀むも可なるもの、少しづゝ讀むべきもの、殆んど暗記するに至るまで反覆せざるべからざるもの等、其種類に應じて一ならず、左れば此の如きは自身の判

斷に應じて取捨撰擇すべきなり、ベーコン卿曰く、『或る書物は玩味すべく、他の書物は鵜呑みにすべく、又他の少數の書物は咀嚼して消化すべし』（"Some books are to be tasted, others to be swallowed, and some few to be chewed and digested."）と、尤千萬の言なり、何れが『咀嚼して消化』すべきか又は『鵜呑み』にすべきかは、讀書生の方寸の中にあることにして一々之を述ぶるの遑なしといへども、其大要を語るは難きにあらず。

曩にも述べたる如く、小說類、新聞雜誌類、其他の雜書類の如きは所謂一讀の後放棄しても差支へなきものなれども、文學研究者は文學を專門とするゆゑ、小說詩歌の書なりとて一讀して放棄する譯には行かず、熟讀を要すべきも、一般の人々には略讀にて可なるべし。

（六）此の如きは大に熟讀すべき書

專門に關する書の如きは大に熟讀して咀嚼し玩味せざるべからず、大に味ふべきの書は、聖賢の書にして、孔孟の書、聖書、佛典等各〻其目的とする所と信仰の相違に因て、其選擇に相違あるべけれど、大體に於て精讀を要すべきや明かなり。

娛樂的に讀むためには敢て一定の方針を立つるにも及ばざれども、其他のものに至つては、漫然讀書するといふのみにては不可なり、畢竟するに書籍の價値は、其中に記載されたることを記憶するの多少如何にあり、多く記憶すれば多くの効あり、少し記憶すれば少しの効あり、是に於てか讀書に就ては記憶法が重大なる關係を有することゝなるべし。

記憶を助くるの道は、反覆、聯想、反對、注意力、此の四者を出づることなかるべし。

元來記憶力の如きは全く天性に因る、天性此の力に富めるものは一たび見聞したることも容易に忘却せず、一たび讀みたることを滔々と語り得るものなれど、其力の乏きものに至つては、日々見聞したるものを日々忘却するといふ次第にて、所謂記憶上の漏洩を防がずんば一事も記憶せざるに至るべし。

反覆とは讀んで字の如く幾度も繰り返して讀むにあり、是れは確かに有益なる法に相違あるまじけれども、同一のことを反覆しては、捗取らざるがため、一册の書を讀み終るこども容易ならず、左れど記憶力の弱きものは反覆するより外に良案なかるべし、但し玆に反覆するとは言ひながら、悉く書中の文字を暗誦するには當らず、概念を取得して反覆すれば足れるもの也、字句を悉く暗記する如きは幼穉なる記憶法に過ぎず。

次に注意力のことを述べたるが故に序でながら之を説明せん、總て何事に關せず、讀書中の事項に就て注意を要するものなれば、一切のことに注意を拂はざるべからざるは言ふに足らず、先づ反覆熟讀の如きは注意力を喚起する有力の手段たるものといふべし、然れども反覆熟讀以外に於て注意力を喚起する方法なきにあらず。

こは書中の重要なる所に點線を施して記憶に便するにあり、然らずんば重大なる部分を書中の餘白に摘錄し、或は備忘錄に記入して必要の場合には之に參省するか、又は此の點線若くは抄錄を反覆するにあり。

（七）印象を強むるの工夫

是れ學生輩の近時應試の準備に際して取る所の法たり、其有力の道なるは申すまでもなし、兎に角人は一讀したるまゝにて捨て置くときは忘却し易きものなれば、何等かの方法

にて印象を強むる工夫をなすことが必要のことにして讀書に因て修養せんとするものに取つては尤も重大の準備たるべし、或は又カード式と稱し、カードに順序を立てゝ記入し、差入自由のものにして、記憶せざる部分を取つて復習するやうにせば、記憶を助くること極めて大なるべし。

何れにしても要領を摘錄するは勞力だけの効あるものなり、吾人の記憶の中にて尤も忘れ易きは、年月日、數字、姓名、地名なり、歴史地理政治經濟上の記事を讀んで殊に混雜を惹起し易ければ、此等は一時面倒なりと感ずるも、兎に角其要領を抄錄するは非常に便利あり、經濟書にして數字を無視したるものは氣の拔けたる麥酒に類するにあらずや、歴史を論じても人名を忘れ、年月日を遺漏しては、其談論の精確なるを疑はしむべし、左れば此等は尤も明白に記憶し置かざるべからず。

地理を論ずるにしても、地名、人口の數等を明白に叙述せざれば、其論は薄弱不精確にして人之に耳を傾けず、左れば重大なる事項に就ては經濟問題と地理問題と、歴史と文學のことに論なく大要は暗記せざるべからず、假例へば、奈翁のウォーターローの敗戰は西暦何年なるかを言はざれば、歐洲史を讀まざるものには何年前のことなるやらと疑團を抱かしむるに當るべし、一たび千八百十五年と明白に說明すれば、それにて其時代の前後の關係を明かにすべし、經濟問題に至つても亦同一なり、日本の米の產額は年々頗る多きに達するが故に、米作の豐凶は日本產業を左右すること大なりといふ議論は、如何にも當を得たりとするも、單にそれ丈けでは餘りに抽象的なり、然れども大體の數字を記憶して、我國の產米額は五千三百萬石內外にて人口一人につき約一石の割に當ると說明したらんには、其說明頗る精確となるに至るべし、書を讀んで斯かる重大事項に注意せず若くは記憶

せざるやうにては、讀みたる甲斐なきものにして、徒らに時間を費し頭腦を惱ますに過ぎざるべけん。

（八）聯想法の活用は斯くあれ

次には聯想のことなるが、こは記憶を助くる一手段たるべし、一例を擧ぐれば、數字を記憶するは幹燥無味にして忘却し易きことなれど聯想に因て記憶すれば忘るゝ恐れなし、電話番號八七四を「ハナシ」（又は「話中」）と記憶し、五千四百八十四圓といふを「イシバシ」と記憶するが如き尤も便利なる方法にあらずや、又反對法に因て記憶することも非常に便利なるべし、白川なる姓氏を記憶せんために、黑田を追憶すれば足れるべく、大山といふ姓を記憶せんとして先づ小川を思ひ出せば足れるが如き類にして、極めて容易なることなり、此の如きは已に世上に於て屢〻實行されたる方式を擧げたるものに外ならず、然れども御身に於て新に工夫を凝らし、好個の記憶法を發明すること固より予の望む所なり。

何にしても餘暇のある毎に讀書に身を献ぐるは、御身の將來のために喜ばしきことなれども、無方針無主義の讀書は讃むべきことにあらず、こは分量の多きのみを貪り、散漫なる智識を得るに過ぎず、從つて實際に資すること能はざるものなれば、其目的を沒却するや大なり。

御身は最早十分に一人前の男となるべき年齡に達したることなれば、尤も主力を注げる讀書の道に就ては相當の考案を有すべしと信ずるが故に、簡單に予の考案を示したるものなり、只々御身の最近の書信に現はれたる所に因て判斷すれば、讀書のために多大の時間

を消過するも、其讀みたる所を記憶せずして茫然自失するが如き感あるは、予の悲しむ所にして御身に取りて尤も不利のことなり、人は一日讀書すれば一日だけ見識を増し、それだけづゝ賢明に向ふべき筈なるも、御身の實際に於て其實の現はれざるは、是れ御身の讀書法の宜きに協はざるを證明するに足るべきのみ。

御身にして苟くも向上發展に敏にして讀書修養の一事が現在尤も重大なる任務なるを知らば、如何なることありとも、迂濶なる方法にて讀書し不徹底の理解力に甘んずるが如きことを排除するに力めよ、讀書は虚榮のためにあらずして、智識の根底を作り、人生の實際に供すべき大切なる準備事業として心得られよ、若し此の覺悟なくんば讀書は無用失費の業たるのみ。

七月十二日

父より

"Read not to contradict and confute, nor to believe and take for granted, nor to find talk and discourse; but to weigh and consider." ——*Bacon.*

第十九信　旅行の利益を説く書

（一）意氣の薄弱に基くのみ

我が親愛なる秀雄よ、御身は實業界に入らんがため、日々準備に怠りなしとのこと、母上より聞き及び、極めて滿足に感ずるものなり、斯かる場合なれば予は一言御身に注意を與へんとす、予は從來御身に勸めて、日本各地を周遊せしめたる外、學校にての修學旅行の場合の如きは、飽くまでも出席するやう申し渡せしは御身の熟知せらるゝ所なり、然るに御身は身體の强健ならざるにも因るにや、兎角に、一室に閉居して讀書三昧に日を送ることを好めども、進んで各地を旅行せんとするの意志は之なきやうに見受けらるゝが、是れ御身のために利あることゝは稱し難し。

尤も予が周遊を勸めし地方は、汽車汽船の便なき不自由の地なれば、御身は之を煩はしく思ひて之を避けんとしたるならむも、こは解し難き心事なり、今日は到る所交通の便開けて汽車汽船のあらざる所なければ、旅行には少しも不自由を感ぜざるべしといへども、それがために亦旅行の興味も減殺されたるの感あるべし。

昔しは東海道五十三次の旅行には、大急行にして驛馬を仕立てゝ行けば三四日を要し、籠にては五六日を要し、徒歩にては十五日乃至は二十日を費したる位にて、旅行は確かに一種の苦痛にてありき、『可愛い兒には旅をさせよ』とは、世人の口に上る語なりしが、是れ旅行の不自由勝ちと困難を經驗せしめんとするより言ひたるもの也、然れども今日は時世一變して汽車汽船馬車人力車所在之なきはなし、從つて旅行は苦痛にあらずして娯樂の

基と見做さるゝに至れり、左れば金錢に不自由なき人は、好んで旅行をなすに至るは毫も怪しむに足らず。

今予が御身に指定して旅行を試ましめたる地は、信州、甲州、飛州、上州の一部にして、何れも途中までは汽車の便ありといへども、それより先きは從歩旅行を試みざるべからざる場合多し、飛驒の高山、信濃の戸隱山、上州の草津溫泉、甲斐の身延寺等は何れも著名の地にして汽車の便なければこそ、却て旅行の興味を多大ならしむる所以にして、御身に取つて好個の快遊をなすべき地にあらずや。

（二）人生の實際に迂なる行動

然るに御身は、『兒は目下多忙のために之を見合はせんとす』云々と稱して斯かる趣味多き旅行を中止せんとするの色あるは、御身の友人なる大村氏より已に承知したる所なるが、是れ實に人生の實際に迂なる語なり、御身が一旦實業界に入りたる曉には、日夕多忙にして眼を廻はす位のものなるべく、其の時に至つて内地周遊を試みんとするも到底能はざることなれば、非常に多忙ならず且つ世事と交渉尠き今日に於て、各地を周遊するは、學校教育の不足を補ふべき實物教訓を與ふること大ならんと信じ、旅行の途に上るべく御身に勸告したる次第なり。

然るに御身は多忙の辭を設けて予の誠意のある所を沒却せんとするは甚だ以て解し難し、今若し此の機を捉へて斷乎として旅程に上らずんば、他日に至りて大に悔悟するも到底及び難からん、是れ御身の注意を喚起する次第なり。

旅行をなすには、頗る多額の費用を要す、いよ〳〵御身が出發するとあれば、予は之を

負擔せざるを得ざるべし、斯かる費用の支出を敢てしても、尙且つ御身に出發を勸告する所以のものは、御身を愛し、御身の將來に就て深く考ふる所あれば也。

御身は言はん、異なる地方に行き、新なる山水に接するとも果して何程の利益あるべきか、寧ろ一室に於て讀書すること優らずや云々、予は讀書の有益を無視するにあらざれど、旅行の利益は亦格別なり、其經驗を學び得るの點は、到底學校にて修業し得らるゝものゝ比にあらず、第一に新なる風景に接し、新なる山水に接するは、心を娛ましむると同時に眼を娛ましむるの基なるにあらずや、斯の如き方法にて疾患を全治したる人は其數頗る多し、又第二には旅行中には幾多の新なる人に接するならむ、汽車中に於ても旅館に於ても或は徒步中に於ても必ず未知の人物に接するの機あるべし、新なる人に接する時は、自然に新なる談話新なる感想を耳にするなるべし、是れ實に御身の經驗を增すことに當らずや、又第三には、新なる地に行けば、從來未だ見ざりしものを見るの便あり。

奈良の大佛の名は聞けども、實地に之を見たることなき人は、目擊の結果は、成程と首肯する所多かるべし。

（三）聞くと見るとは往々大差あり

日光東照宮の壯麗美觀を聞きたる人も、實際之を見ざる中は、所謂結構の何なるを辨ぜざりしに、實地に之を見れば、定めし日光を見たる結構の眞味を始めて解すべし、是れは其一例なれども、談話にて聞きたると實地とは往々相違することあるものなれば出來得る限りは、何事に就ても實際を目擊し置くは大なる便宜あり、『百聞は一見に如かず』と申さるゝ如く、單に耳學問のみなして眼の學問をなさゞれば、自己の言論も往々實際に合せざ

るべく、事情に迂濶と化せんのみ。

凡そ世に處して事を成さんとするには、よく人情風俗を解し、自ら之に投合するやうに爲さゞれば、些細のことにて他人の感情に反抗し易く、之がために折角成立し得べきことも失敗の外なきに至ること頗る多し、而して人情風俗を解するには、機慧の觀察力さへあるものなれば誰にても出來る業なれども、屢〻各地に旅行して新なる見聞をなすに因りて其觀察力の發達するに至るは否むべからず。

左れば予は御身をして斯かる利益を享受せしむるやう、暇ある毎に旅行すべく注意し置けるに、御身は僅に二三回の外、予の言を守ることなかりしは予の尤も遺憾とする所なり、御身が讀書するといふも見聞を廣むるためなるべし、旅行は見聞を廣むるに於て、讀書の及ばざる所に出づる程のものあるは御身の疾くに知了ありしことならむ。

殊に御身の如き青年時代にありて、旅行は勇氣を鼓舞し志氣を訓鍊するに缺くべからざる方法たるべし、予は壯年時代には幾度か富士山登遊を試みて、友人と健脚を競ひたる位にして、實に此上もなき興味を感ぜり、今日といへども時間の都合さへ許容せば、全國を周遊して英氣を養ひ兼ねて疲倦を慰せんとするの念あれども、刻々に迫り來る劇務は、到底予をして飄然として一笠一簑の旅人なることを許さしめざるを恨みとす、御身は之と異り、多少時日の繰合せも協ふべく、又健康の點に於ても不十分の所あれば、萬障を排して各地の周遊を試み、見聞を廣ふするに加へて健康增進の資となさんことを求むる也。

（四）是れ心膽を鍊るの活法なり

尤も此の旅行のために、御身は途中にて不自由を感ずることもあるべく、寒氣と戰ひ、

風雨を冒すことも定めし大なるべし、予は此等のことは善く承知し居れり、然かも猶且つ御身に之を勸むる所以のものは、斯かる試嘗に遇ふことが卽ち御身の心膽を錬り、意氣を養ひ、兼ねて又健康を增進する所以なれば勇を鼓して之に當らんことを求むる也、男子丁年に達すれば、堂々たる一人前の男になりたるものにして、其行動は如何にも男子らしくありたきもの也、大森なる加納子爵の如きは、數年前のこと僅に十二歲及び十歲の二令孃をば互に相携同して旅行の途に就かしめ、然かも無事なるを得たりき、尤も是れは汽車旅行を試ましめたることには相違なきも、其勇氣を鼓舞せしむるに至りては、徒步旅行と何の相違する所あるべきか、況んや幼少なる婦女子の身にてありながら、能く安全に其目的を遂げ得たりしに、御身が丁年に達しながら、汽車の便なき地なるがため、事に托して之を免れんとするは何たる意氣地なき次第なるぞや。

實業界の活戰場に立ち、多數の人々と接見し、有爲の才幹を揮はんためには、人生の風浪を凌ぎ缺乏に堪へ、辛酸を嘗めて、能く之に打ち勝つの覺悟なかるべからず、旅行は之を試むる最良の法たると同時に前述の如く、新なる經驗、新なる觀察を修養するに就て絕好の方法たるべし、然るに御身にして之を煩はしく思ひ、之を免れんとするの意を示すといふは、是れ人生困難の試錬に堪へ難きを示すなり、是れ實に笑ふべき薄志弱行の至りならずや、幼稚なる女子にも劣る行爲を演じて自ら恥づることを知らざるといふに至つては、最早男子としての意氣を喪失したるものにして、其心事の柔弱怯懦なる、女子にも劣るものにあらずや。

御身の行爲が斯くまで意氣地なきことを悟るに於ては、御身は定めし悔恨の餘り、然らば是非一つ出發して尊慮を安んぜんとする旨を返信するならん、斯くあるは當然のことな

り、御身にして予が斯くまで主張するものを無視するが如きことあらば、予が御身の將來に就て最早や取合はざるに至るやも計り難し。

（五）少年時代の感想に過ぎず

旅行を以て苦痛とか煩勞とか思考するは、小童時代の感想のみ、苟くも分別力を有する年齢に達したるものが、斯かる幼稚なる感想を以て之を迎へ、其與ふる利益と經驗、觀察力と快樂を無視するが如きに至つては、實に其愚昧に外ならざるを表するものにして、殆んど常識ある人とは思はれず、御身は貝原益軒の『樂訓』を讀みたるか、若し讀まざれば、速に一讀せられよ、御身はラボック翁の『人生の樂み』を讀みたるか若し未だ讀まざれば、之を繙讀せられんことを勸む、兩書とも旅行の益を說くこと詳細に亘れり、今其大要を玆に記述するも不可なるにあらざれど、手許に同書を見出すこと能はざれば、如何ともすべき道なし。

兎も角、旅行は何れより見ても、經驗、觀察、療養、インスピレーション等を養ふ基たるも、苦痛と認むるものは殆んど之なく、寧ろ贅澤物の如くに見做すものあるに至れり、然らば御身たるもの一たび勇躍して旅程に上りたらんには、以後自ら實地に試賞を試みんとの念を禁ずる能はざるべし。

碩學ベーコン卿は敎へて曰く、『旅行に於て見るべきものは王公の邸宅、開廷中の法廷、宗務敎院、敎會、僧庵、都市の墻壁、堡壘、港灣、舊物、殘壘、圖書館、學校、辯論、講義、海漕業、海軍、大都會附近の國家の邸宅、庭園、武庫、砲兵工廠、火藥庫、取引所、倉庫、馬術敎錬、劍術、兵卒の調練等、人々の集合する喜劇、寶玉、衣冠の珍品、陳列室、